中村朝海

385.9
089-3
B

日常作法

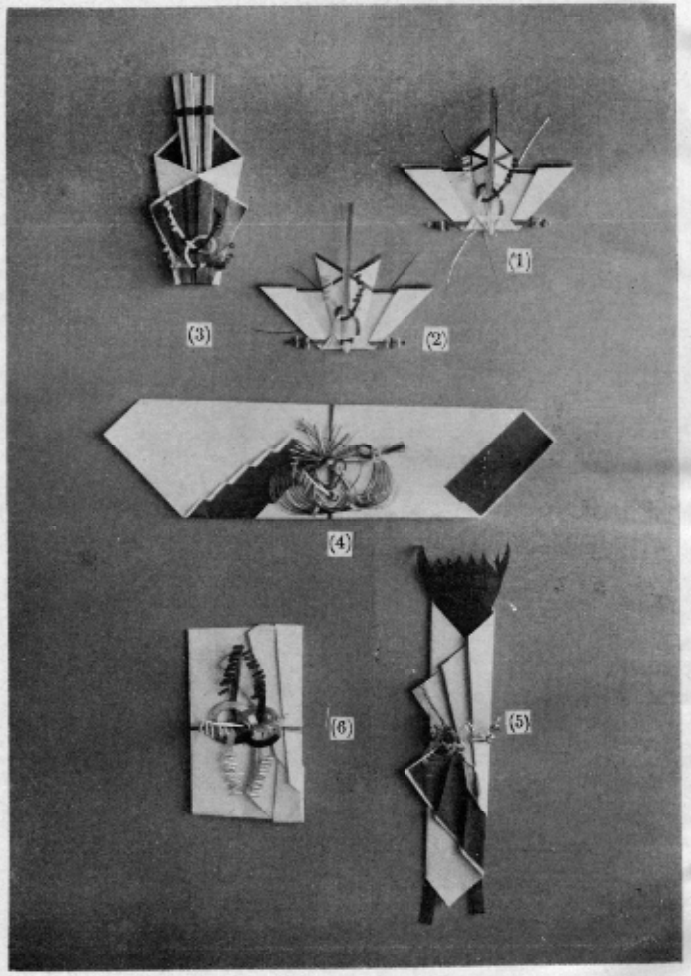
引水と紙折

長崎學女等高妻大・長崎學藝技藝大

著カタコ妻大

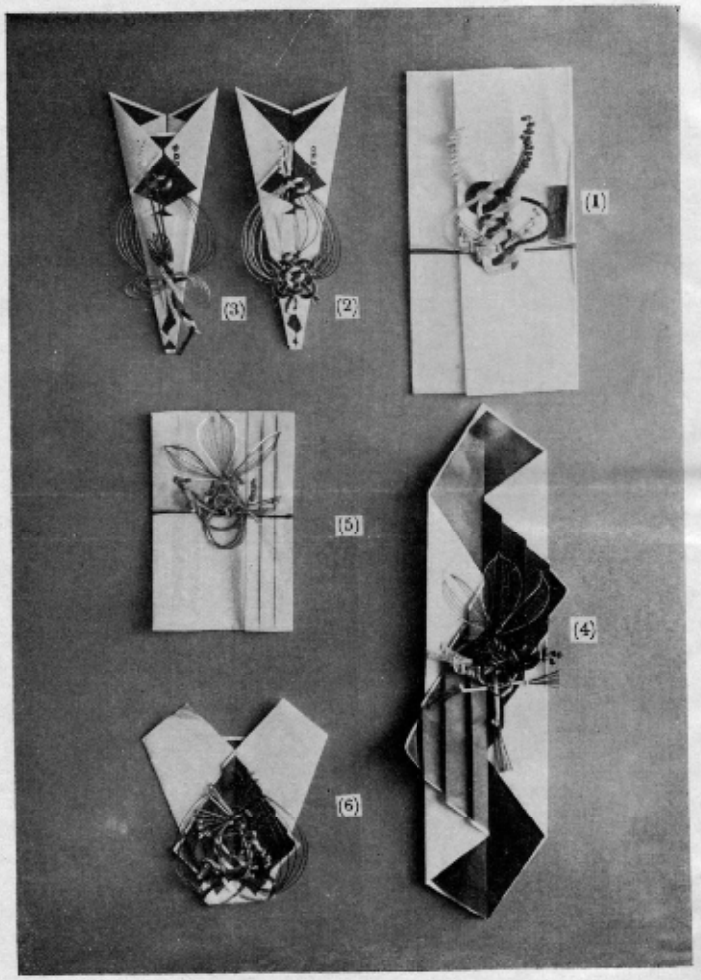
東京

文光社發行



(1) 燈籠
(2) 雌雄
(3) 末廣包
(4) 子生婚包
(5) 長寿斗包
(6) 結納金包

大妻女子大学図書館
2012. 2. 3
483031



(1) 腹帶包
(2) 富の尾(雄)
(3) 同上(雌)
(4) 長覆手包
(5) 看料包
(6) 赤留女包

例言

一、本書は高等女學校・女子師範學校の作法副教科書に充てんことを主目的として編纂しましたが、又處女會・婦人會等の講習用書竝に一般家庭の參考書としても適切であるやうにと注意をいたしました。

一、本書は日常作法として一般に行はれて居ります折紙と水引の結び方とについて其の概要を述べたものであります。

一、本書は基本的のものを選んで述べたものでありますから、實生活に適するやうに之を擴充・應用せられることは皆樣の御自由であります。

一、本書は取扱上の便宜の爲め水引の長さは今暫く曲尺を以て表はしておきました。

附言

技術に關することを文章であらはす場合には動もすると解りにくい點が出來るものであります。若し本書中不明の箇所が御座いました際は、其の部分の實物標本

を大妻學校へ御申込になれば實費分讓を受けることが出來ます。實物を一見すれば忽ち氷解せられるのでありますから、御注意までに此の事を附け加へておきます。

昭和三年七月三十日

大妻コタカ識す

日常作法 折紙と水引（目次）

第一課　總說……一
第二課　金銀包……六
第三課　熨斗附紙幣包と二本鮑結……一一
第四課　折返し紙幣包……一三
第五課　凶事用紙幣包……一六
第六課　袱紗包……一九
第七課　合蝶……二一
第八課　木の元包……二七
第九課　木の枝包……二九
第十課　腹帶包と子持鮑……三〇

第十一課　出産祝の金包と桃の結び方……三三
第十二課　巻反物類の包み方と花結……三七
第十三課　胡麻鹽包……四二
其の一……四二
其の二……四四
其の三……四五
第十四課　きなこ包……四七
第十五課　山椒包……四九
第十六課　箸包……五一
其の一　普通用箸包……五一
其の二　因事用箸包……五三
其の三　祝儀用箸包……五四
第十七課　楊子包……五六
第十八課　菖蒲及び蓬包……五八

第十九課　女夫熨斗……六〇
第二十課　目錄包と龜結……六三
第二十一課　末廣包と蝶結……六七
第二十二課　結納金包……七一
第二十三課　壽留女包……七四
第二十四課　子生婦包……七九
第二十五課　勝男武士包……八三
第二十六課　樽料及び肴料包……八七
第二十七課　帶料包……九三
第二十八課　袴料包……九七
第二十九課　長熨斗と鶴結……一〇一
第三十課　白髮包……一〇五
第三十一課　祝儀用萬物包……一〇八

其の一　日の出に鶴……一〇八
其の二　鶴　亀……一一〇
其の三　二見ヶ浦……一一二
其の四　花　籠……一一五
第三十二課　魚の尾包……一一九
第三十三課　目録綴……一二二
第三十四課　御神酒口……一二五
第三十五課　富の尾……一二八
第三十六課　雄蝶と雌蝶……一三一
第三十七課　長熨斗包……一三六

目次（終）

日常作法　折紙と水引

大妻コタカ著

第一課　總說

㊀**裝飾の沿革**　人に物を贈りますには、相當な裝飾を施すのが禮でございまして、我が國では神代の昔から、物を贈るに、木の枝に吊すとか、或は草木を折り添へるとか、又は藁や繩で束ねなどしたものださうでございます。現今なほ赤飯を贈る時に南天の葉を載せるとか、鮮魚に笹の葉を添へるなど風流な習慣が殘つて居りますが、時代の進運につれて、かうした古風な床しさは次第にすたれて、特別な物の外は紙に包んで水引をかけ、熨斗を添へますのが習慣となりました。

㊁**包み紙**　贈答の包み紙には大高檀紙（奉書を鮮紅の絲にちゞませたもの）が本式で、一番高級であります。）奉書（本式）・改良奉書・綿入・美濃紙・西の内・半紙・色紙（赤・金・銀）等を用ひ、包み紙の數は婚禮には二枚、凶事に

は一枚、其の他の場合は成る可く二枚を用ふるのが宜しいのですが、略式の場合には一枚でも差支なく、又小さな物は二つ折にして用ひます。二枚重ねて用ひます場合には紙の表を外に裏を中にします。

㊂包み方　包み方は、紙の上に品物を載せ、左を先きに右を後に折り、紙の端は、左の端又は中途でも必ず左向きとします。品物が大きくて紙の小さい時は、表からかぶせます。裏で明いても差支はありません。凶事の場合は合せ方を反對にします。

㊃水引の種類　日常及び祝儀に關する贈答品には、紅白・赤白・金銀・赤金・赤銀等を用ひ、凶事に關する贈答品用には、白・白黒・黄白・銀白の水引を用ひます。

細工用としては銀・金・奴（普通水引に細糸を巻いたものを細糸巻ともいひます。）・左巻（赤銀・赤金・其の他何色でも一色づゝ、たゞたに巻いたもの。）・竹の葉（五筋の中四筋緑で一筋白のもの。）・松葉（元結を青く染めたもの）・五色（一筋づゝ色の違ふもの）等があります。

左巻に就て一寸申添へておきます。在昔物品の贈答に藁縄で結んだといふことですから、此の左巻は其の形を殘すかと偲ばれます。

この外水色・緑・鶸（トキワ）・黄・桃色・紫・淡紅・藤色など種々あります。

長さは三寸・五寸・一尺から八尺までありまして、太さは長さに應じて段々太くなります。

㊄水引の掛け方　水引の掛け方は、婚禮の場合は二本、凶事の場合は一本で其の他の場合は隨意にします。

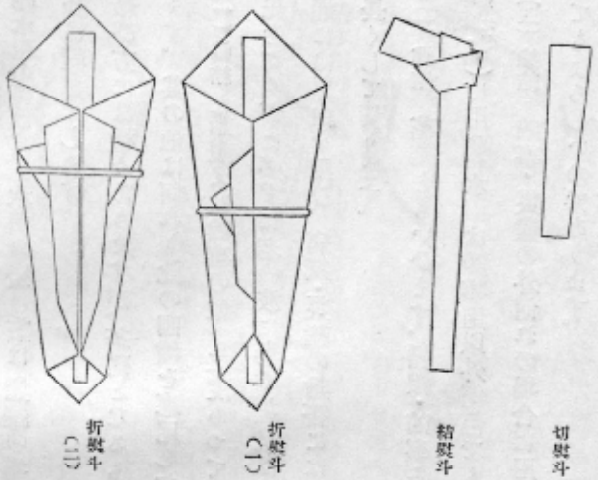
結び方には種々ありますが、基礎となるものは眞結・蝶結・鮑結・逆鮑結の四種であります。其の他は何れも此の四種を應用したものであります。

（一）**眞結**　婚禮又は凶事の如き二度あつてならない場合に用ひ、婚禮の時には水引の先を切らずに必ずに老の波に巻くか、又は輪にします。凶事の場合は白を本式とし、普通には黒白を用ひ、病氣・災難の贈答には平常の水引で眞結にし、先を紙より五分位長くして切ります。

（二）**蝶結**　花結ともいひます。婚禮・凶事・災難等の外幾度かさねてもよい慶事（例へば出産・昇進・栄轉・新築など。）に用ひ、水引は凶事用以外何色でも宜しいのであります。

（三）**鮑結**　凶事・災難の外何れの場合に用ひても宜しく、水引も凶事用以外何を用ひてもよろしいのであります。

（四）**逆鮑結**　凶事にだけ用ひます。香奠以外蠟燭・線香・遺物分等に用ひます。



㊅表書　表書は贈答しようといふ意を明瞭に書き表すべきものであります。

（一）表書の一例

中元・年玉・餞別・御土産・歳暮・御見舞・御禮。

御祝・壽・御祝儀。（先方の祝の場合）

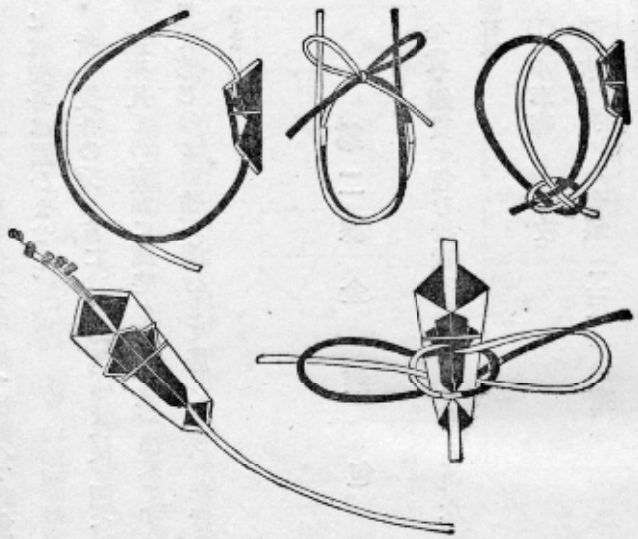
内祝・壽・祝。（自家の祝の場合）

御霊前・御供物料・御香奠・御香料。（他家の凶事の場合）

志・忌明。（自家凶事の場合）

其の他呈上・松の葉などと記します。

（二）位置　文字の位置は中央の上に、先方の名は左上に、自分の名は左下に自署するを禮とします。名刺は略式であります



現代の略式熨斗

が、若し用ふる場合には貼附けます。金錢の場合は、包紙の裏又は中に、『一金何圓也』と示しておくべきであります。

㊆熨斗　熨斗には折熨斗・切り熨斗・結び熨斗等の種類があります。元來熨斗は乾鮑の伸した物を切つた切熨斗か、結んだ結び熨斗を用ひますのですが（略して海草類・扇・紙帛を代用することもあります。）、今はこれを紙に包んだ折熨斗を多く用ひて居ます。結婚などの祝の時には、紅白二種の大奉書の長熨斗を用ひます。

凶事の場合と動物性食品、例へば鮮魚・乾魚・鰹節・壽留女・卵・鳥肉類等を贈る場合には熨斗は用ひません。

折り熨斗の折り方には種々あります。四ページに示してあります。

近來凡ての方面に簡略を尊ぶ風が出來て、日常贈答品の裝飾にも極く手輕に一寸見た感じのよい物が流行して居ります。參考の爲め五ページに其の二三を掲げておきました。

第二課　金　銀　包

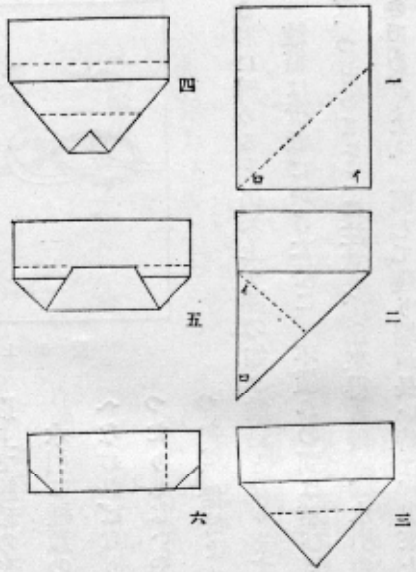
金貨・銀貨を包む折紙の名稱であります。水引により吉凶何れの場合にも用ひます。

㊀材料

(1) 小奉書　一枚。

(2) 水　引　金銀　二尺　一本宛。

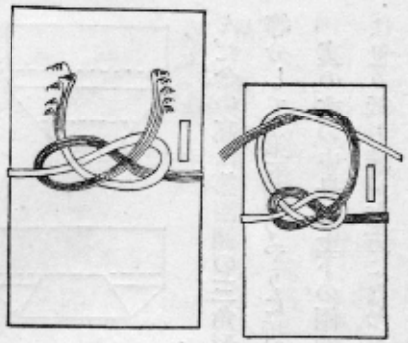
㊁紙の折り方



紙の折り方は、表を外に第一圖の如くし、次に第二圖の如く(イ)の角を、第一圖の點線に沿つて斜に折ります。

次に第三圖の如く、第二圖の點線の所から折ります。金子は第三圖の三角形の所に入れるものでありますから、金貨の大さにより第三圖の點線の大さを定め、包んだ金の高は第四圖の三角形の所に記入します。第四圖に示した如く殘りの幅を三等分して、第五圖のやうに折り、更に折ると第六圖となります。

裏の丈の中央で上下の兩端が四分位重なり合ふやうに裏に折ります。折つたものは包み紙の端が左方になつて、上下の兩端は包の裏の方で上部の端が上になるやうに重ねます。



鮑結出來上り圖

㊂水引の結び方

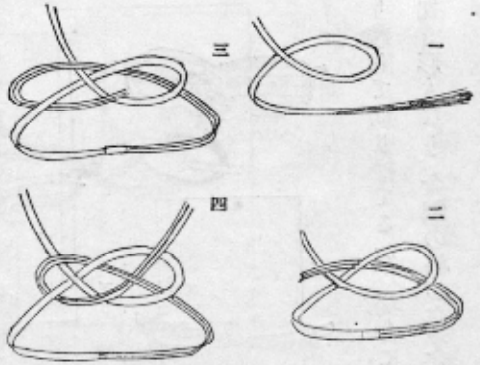
(一) 鮑結　結び方は先づ輕く水引をしごき、第一圖の如く揃へて、白で輪をつくり、第二圖の如く赤を白の輪の下から出して、先を白の上に載せ、それから第三圖・第四圖の如くに赤を通します。

以上で鮑結の形が出來上つたのであります。

水引は種類の如何によらず、常に五本ともよく揃へなければなりません。途中重なり合つたり、跨がつたりしないやうに、丁寧に一々指先で並べて落ちつかせ、恰好よく形を整へた上で折紙にかけ、程よき形に締めると出來上り圖の如き鮑結となります。

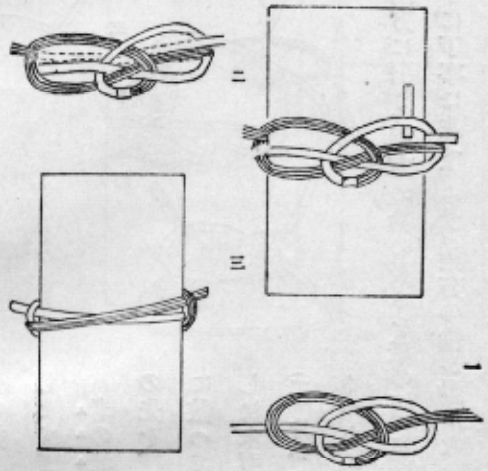
鮑結は折紙にかけた時に、不慣れの間は結び目が上部に向つて跳び上り勝なもの故、つとめてそこに注意し、出來得る限り、水引の結び目が一文字になるやうにすべきであります。而して殘り端が長い時は、出來上り圖の如く鮑結の上の方で輕く一つ大きく結んで、其の兩端を揃へて切るのも面白味があります。手數のかゝるのを厭はぬ時は、兩端を螺旋狀の波に卷くと一層趣があります。結婚の場合の如く切るのを忌む時には必ず此の方法を應用します。此の卷き方を老の波と申します。

老の波の卷き方は、目打の先の方に向けて、水引の先を、三・四分出して、一卷まきつけ、そしてそれに倣つて左手の拇指と、人さし指とで目打の先に殘した水引の上に、ぐるぐる卷きつけます。



(二) 片かへし　結び方は、最初鮑結をし、第一圖の如く中央の帶の所の輪が短くなるやうに、鮑結の輪を兩方に引き、兩方の輪の長さを紙の幅に揃へて、更に水引の一筋々々が重ならないやうに丁寧に並べ、且つ兩方の輪が動かないやうに指先でおさへて癖をつけておきます。次に左の方に出て居る銀の殘り端を第二圖點線に示してあるやうに、折紙の幅

出來上り圖

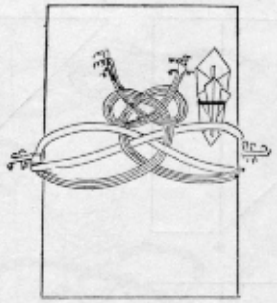


に合せて裏の方に折り、折紙の裏を廻して右の方に出し、銀の水引を輪へ通して、銀の水引の上に引き出します。

次に右方の金の殘り端を銀と同樣の方法で裏へ折つて折紙の裏に廻し、前の銀の水引と裏の方で交叉させ、出來上り圖の如く左方の金の水引の輪の中へ通して、金の水引の上に引き出すと片返しは出來上ります。

水引の筋の重なりを整へた後、折紙の兩横へ水引の殘り端を、各二・三分許り殘して切り捨てるか、場合によつては老の波に卷きます。裏から見ると第三圖の如き形となり、金銀の筋が交叉して居ます。

第三課　熨斗附紙幣包と二本鮑結



出來上り圖

一材料

(1) 中奉書　一枚。

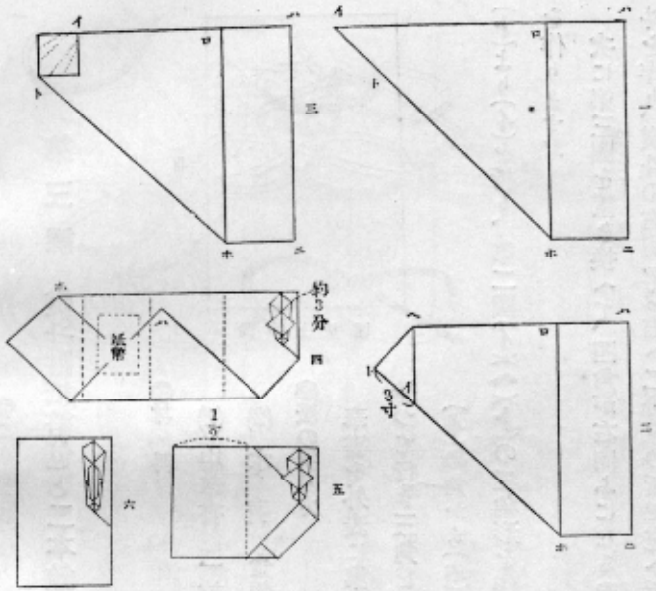
(2) 水引　金銀　二尺五寸　二本。

二紙の折り方

奉書を外表に第一圖の如く(ロ)を(イ)(ハ)線の上に持つて行き三角を折ります。

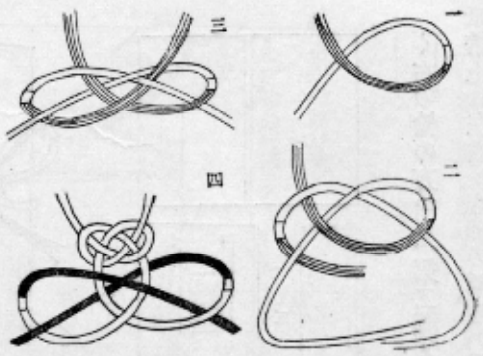
(イ)の角から(ホ)の方へ三寸の所の(ヘ)(ト)を定め、(ト)より(イ)を折り、第二圖(イ)(ヘ)(ト)の三角形を作り、之を第三圖の如く開いて四角を作ります。

次に第三圖を置き換へて、四角が右向ふになるやうに置き、點線の通りに四角で熨斗を作り、熨斗の右肩から右へ二分位の所で左へ折り、次に紙幣を入れる丈を六寸と



して、(八)の部を上に折り重ねると第四圖となります。

今度は六寸丈のものゝ左端(二)を右に持つて行き、先を熨斗の下に入るやうに折ると第五圖となり、之を又二つに折り、後之を開くと第四圖點線の如くに筋が出來ます。此の時、左より二つ目の四角の中に紙幣を入れ、左から順に筋に從つて折り疊み、最後に熨斗が上になるやうに右から折ると第六圖の如く出來上りとなります。



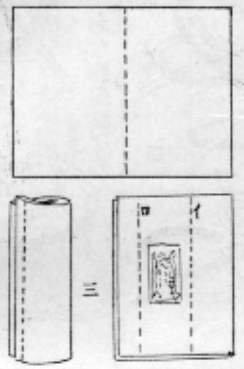
㊂二本鮑の結び方

結び方は第一圖の如く一本の水引で輪を作り、第二圖の如く他の水引を第一圖の輪にかけて、第三圖の如く二つ拵へると第四圖の如くになるから、包み紙の上に載せ、片返し結びの裏のやうに、兩横の殘り端を裏に廻して表側に引出し、出來上り圖のやうに其の端と上の端とを卷きます。而して五厘四方小さい赤紙を重ねて中央に熨斗をつけ、金水引の切れ端を解いた金紙で帶を貼ると出來上ります。

第四課　折返し紙幣包

出來上り圖

此の出來上り圖は折り方を示す爲め丈の上部だけ折つて下部は折らない所を示したものであります。



㊀材　料

(1) 中奉書　一枚。

(2) 水　引　金銀三尺　一本(わな鮑)。

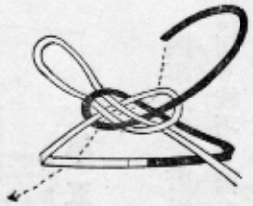
㊁紙の折り方

紙を外表にして第一圖の如く横を二つに折ります。次に紙の輪を向つて右にして、第二圖のやうに置いて、中に包む紙幣の幅より五分廣く右の輪の方から、第二圖(イ)(ロ)の標をして、(ロ)を先に、(イ)を後から折りますと、紙幣上に左右から紙の兩端が重なつて、細長いものとなります。

次に第三圖の點線に沿ふて、輪の方から、幅の三分の一右に折り返しますと、出來上り圖のやうなものになりますから、恰好を見て、適宜の丈に、上下を裏に折り返へして少し重なるやうにして置きます。

㊂水引の結び方

わな鮑の結び方



わな鮑は鮑結の一種で、鮑結の水引の殘りの長いとき、又は鮑結では寂しい場合にこの結び方を用ふるのであります。結び端が左右とも引き返へしてありますから、婚禮や凶事等には用ひません。

結び方の順序は先づ三尺の金銀の水引で大きく鮑結を作つて、銀の殘り端を圖のやうに、下から上に向つて圓く撓め曲げて左の方に輪を作つて、其の端を初めは鮑結の銀の筋と同樣の穴にくぐらせて、銀の筋の上に引き出して、銀と金の二筋の上を跨がせて、最後に圖のやうに、右方の下の銀の筋の下をくぐらせて、右の下に向つて引き出します。

次に右方の上にある金の端を銀と同様に撓め曲げて右の方に輪を一つ作つて、其の端を銀と反對の順序で銀の筋の上を跨らせ、金の筋の下をくぐらせ、最後に金の筋の上を跨らせて、左方の下に引き出します。

第五課　凶事用紙幣包

凶事用の紙幣包は、他の祝儀用のものとは、趣がちがつて居ます。包み紙の表面には何も技巧を加へませんで、極めて單純な折り方であります。

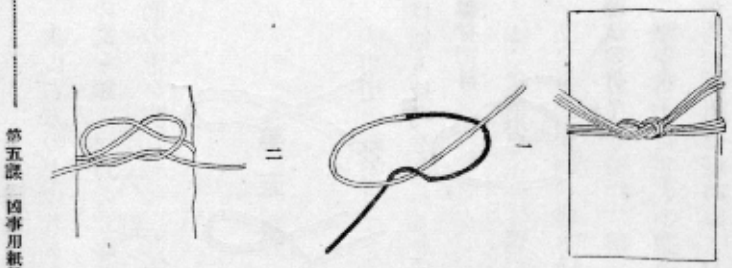
㊀材　料

(1) 小奉書　一枚。

(2) 水　引　白又は白黑　一本。

㊁紙の折り方

紙を外表に正しく置いて、中に包む紙幣の幅よりも凡そ五分ばかり廣くして、右端から左の方に紙の厚さだけづゝ寸法をひかへ目にして、左端まで標をして、其の通りに折り目をつけます。



出來上り圖　眞結の結び方

次に左端に紙幣を載せて、一卷まいた所に、金額を記して、紙幣が拔き出ないやうに、丈の兩端を少し三角に折つて、更に折り目の通りに右の方へ向つて、吉事の時と反對に、紙の上の端が左に來るやうに、最後まで卷きます。

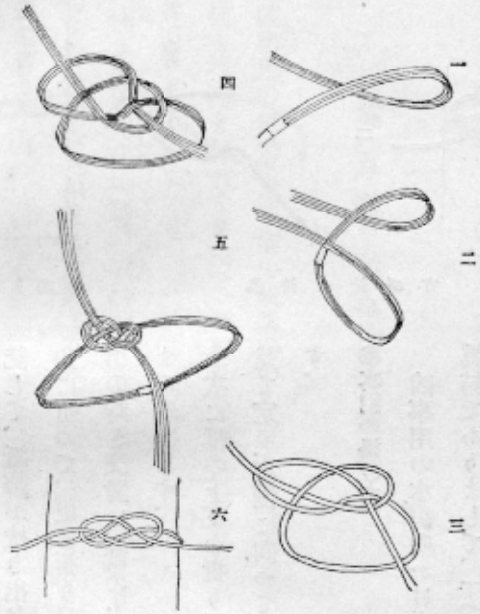
次に紙の上下を折り返へすのですが、長さは恰好を見て定め、裏側に向つて兩端を折りますと出來上ります。

㊂水引の掛け方

凶事用の水引のかけ方は二通りあります。一つは眞結でありまして、一つは逆鮑結であります。

(一) 眞結の結び方

第一圖のやうに黑を上からかけ、白を下にくぐらせ



逆鮑結の結び方

て、第二圖のやうに白を右から黒の上にかけて締めますと出來上り圖のやうになりますから、殘り端は包み紙よりも五分位長く殘して切つて置きます。水引が長く殘つても、輪結にしたり老の波を卷いてはなりません。

(二) 逆鮑結の結び方

第一圖のやうに初め作る輪の先を下にして、楕圓形の輪をつくり、又第二圖の如くに輪を作つて、其の端を左方に向つて第三圖のやうに一方の端の下へくぐらせます。

而して後から作つた輪を第四圖の如くに最初に作つた輪の下に重ねておいて、下をくぐらせて手前の方に引き出して、程よく締めますと第五圖の如き逆鮑結が出來ます。而して水引の兩端は第六圖の如くに横にひいて、包み紙の幅よりも五分づゝ長くして切ります。

第六課　袱紗包

二

三

四

二〇

㊀材　料

奉書　二枚。

（正方形）

㊁紙の折り方

先づ紙を正方形に裁ち、二枚を外表に重ね、(イ)(ニ)を重ねて折ると、對角線(ハ)(ロ)の線が出來、次に點線の如く(ハ)(ニ)の三分の一の(ホ)と、(ロ)(ニ)の六分の一の(ヘ)の線を折り、更に之を第二圖(ト)(チ)より折り返します。

(ト)は(ハ)(ロ)線の上、(チ)は(ホ)(ヘ)(ヌ)線の間の三分の一位の邊。

次は(ト)(チ)(ニ)の三角を第三圖の如く熨斗の形に折り、今度は右側に殘つて居る三角を(リ)(ヌ)の線により左に折り、更に(ル)(オ)の線より之を右に折り返します。

(ル)(オ)は(ヌ)(ヘ)(ホ)線の間の三分の二位。

更に之を出來上り圖の如く、三段の襞に折り、上部と下部を(ル)(オ)の部より後ろに折れば全く出來上ります。

出來上り圖

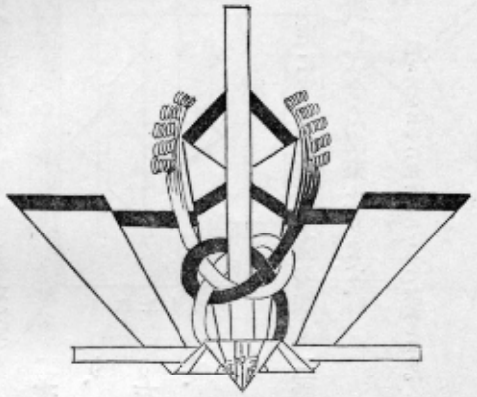
幅と丈とは中に包む品によつて加減します。

第七課　合　蝶

合蝶は正月の屠蘇の銚子につけます。又結婚式の時に雄蝶・雌蝶の二つの蝶を用ふる代りに、略して合蝶一つを用ふることがあります。

一材料

(1) 奉書　半枚(五寸四角)。
(2) 赤紙　半枚(奉書より周圍一分廣く)。
(3) 水引　金銀　一尺五寸　一本。
　　左巻　二尺　一本。



出來上り圖

二紙の折り方

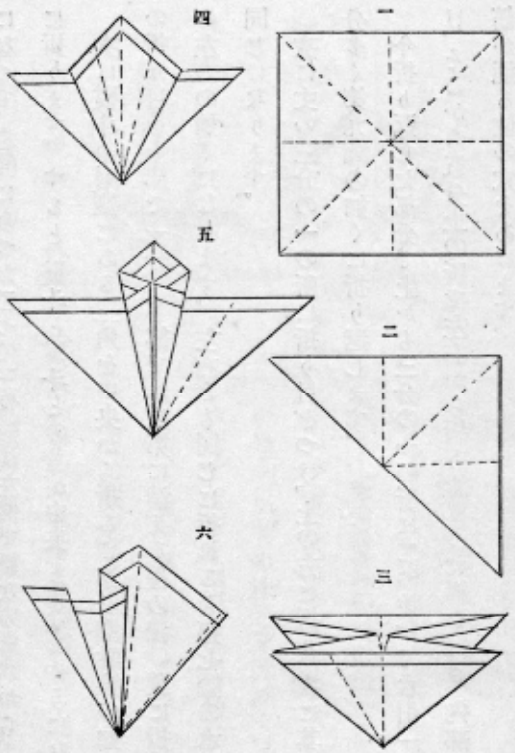
初め紙をそれ〳〵寸法通りに裁ち、奉書の裏と赤紙の表と重ね、中央を一寸糊で止めておきます。

而して第一圖點線の如く折目をつけ、第二圖の如く、其の一方の對角線を折つて三角形をつくり、中央の筋を內側へ折り寄せた第三圖の形を作ります。

次に第三圖の左の方の點線の如く中央の點線から左の角までの間を二等分して筋をつけ、其の筋から左右に開いて第四圖の如き形とします。次にこの中心から兩横を二等分して中央に折り寄せて、第五圖に示せるが如き折り熨斗のやうな形にします。

今度は右の方の二つ重なつて居る三角形の下になつて居る紙を前と同樣の方法で折ります。

其の折り方は先づ全體を裏返しにすると、今折つた熨斗が裏側



になつて、右側にあつた二つの三角形が左側で重なりますから、其の上の三角を熨斗に折ります。すると、熨斗と熨斗との背が中央で重なるやうになります。

次に熨斗の兩側にある三角を中央から折ると第五圖點線の如き折り目がつき、この折り目を上部で一分、下部では次第に消える程の淺い襞に折り返しますと第六圖の左方の如くになります。左右とも同じに折れると第七圖の水引を掛けないものと同じになります。

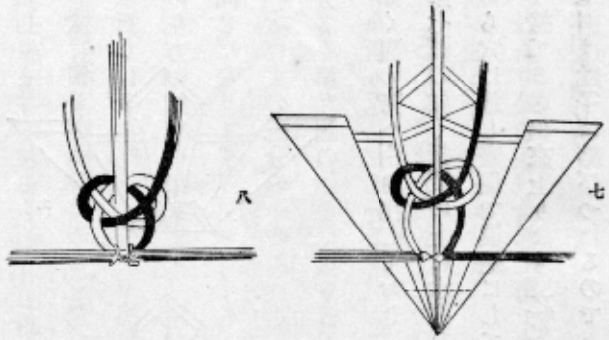
次に丈の三分の一の所に折り目をつけ、上の方に折り、次に其の二分の一よりも一分多く第九圖の如くに折り返します。

今折り返した部分で上から三分の一の所に二つ並べて水引一筋が通る位の穴をあけ、そこから五分上の所で左右から折り重なつた紙を開き、内部に二つ並べて水引一筋が通る位の穴をあけます。

以上で蝶の胴が全部出來上つたのであります。

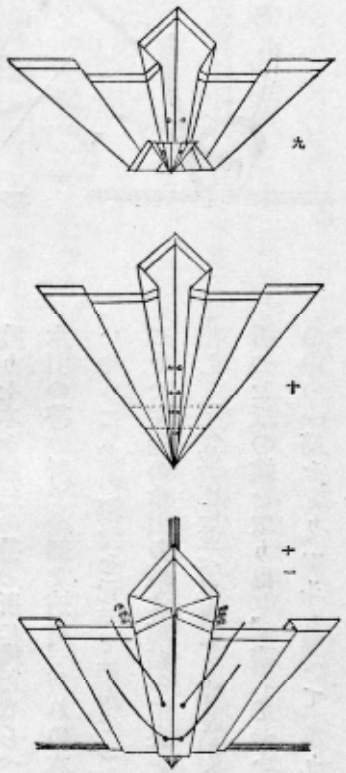
㊂水引の結び方

金銀一尺五寸の水引を一度しごいて普通の鮑結を結び、(イ)の折り目から上部の尖



端迄の丈の中央になるやうに、第八圖の如く軟かに締めます。

左卷二尺の水引の中央の帶から二つに折り、更に二つに折つて切ると、一方は帶の中央から折れた五寸の丈となり、一方はばら〳〵になつた五寸の丈十本の筋となります。此の中から三本を除き、殘り七本を鮑結の帶の所に横にならべ、今切つた水引の帶の所で全部を挾み、何れの水引も動かないやうに、其の根元を元結で結んでおきます。帶のついた左卷の水引の端は鮑結の中央から前に拔き出し、一本並びに並べて裏から糊を引きおき、前に折つた紙の蝶を取り出し、殘しておいた水引三筋の中の一筋をとり、熨斗も開いて、第九圖の穴に通し、第十圖の如く次の穴にも一筋通し、第十一圖の

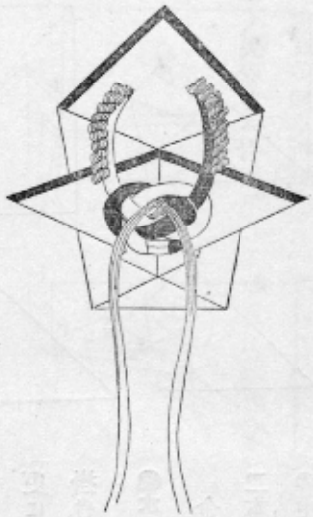


如く裏の方へ引き出しておき、表側の熨斗を元のとほりに折ります。

第七圖の如く折紙の上に水引を載せ、出來上り圖の如くに折り、殘りの水引一筋を裏から穴に通し表側で眞結にして其の端を卷きます。卷いたものゝうち二卷殘して切り捨てると出來上ります。之を裏から見ると第十一圖の如くになります。裏の四筋の水引は銚子に結びつけるのであります。

鮑結の端は卷いておきます。鮑結の水引は一筋でなく二筋位は增しても差支はありません。

第八課　木の元包



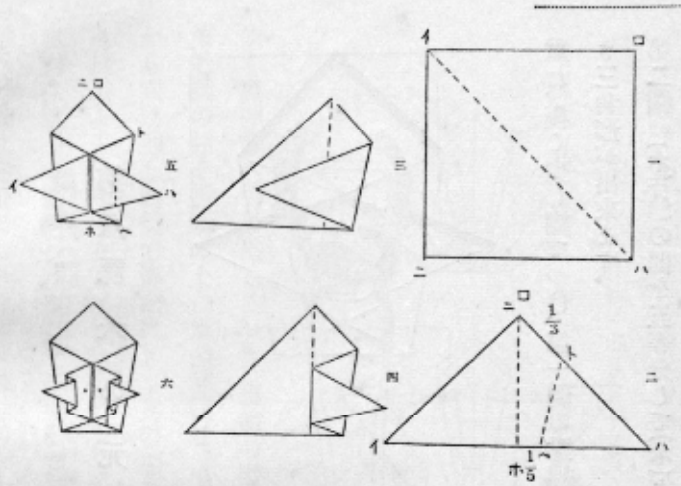
㊀材料

(1) 奉書　九寸角　一枚。
(2) 赤紙　同上。
(3) 水引　金銀　二尺五寸二本。
　　赤　二尺　二本。

㊁紙の折り方

最初奉書の裏と赤紙の表とを重ね、極く少し糊でつけ、第一圖の點線の通りに(ニ)を(ロ)に重ねて折ると第二圖の如き三角形が出來ます。

第二圖の(ホ)(ハ)の間を五等分して(ホ)より(ヘ)を印し、(ハ)(ヘ)の三等分の一を(ヘ)より



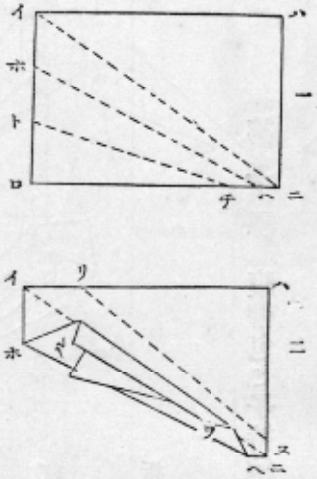
取り(ト)を定む。次に(ヘ)(ト)の線より(ハ)を左に折ると第三圖となります。

次に第四圖の如く(ホ)(ロ)の線上より右へ折りかへし第五圖の如く熨斗の形を作り、更に第六圖の如く中央に襞を取つて水引を掛けます。

㊂水引の結び方

金銀二尺五寸二本で鮑結をなし、赤二尺二本を第六圖の●印の所に裏より出し、鮑結の中央を通して眞結をなし、端は下方に垂れさせたまゝでおき、鮑結の水引の先は圖の如く中央を長く順に外側を短く老の波に卷ます。

第九課　木の枝包



㊀材料

小奉書　二枚。

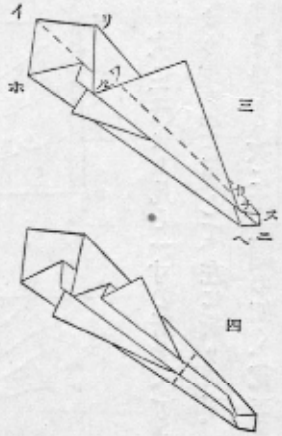
㊁紙の折り方

先づ小奉書を外表に裏ね、第一圖の如く標をつけ、(イ)(ニ)は對角線、(イ)(ホ)・(ホ)(ト)・(ト)(ロ)は、(イ)(ロ)の三分の一の長さであります。

次に(ニ)より凡そ一寸の所を(ヘ)とし、(ホ)(ヘ)を右に折り、更に(ト)(チ)を(イ)(ニ)の線より少し先に出して、左に折ります。

それから次に第二圖の如く、(ル)(ヲ)の襞を取ります。

次に(イ)(ホ)と同寸に(イ)(リ)を標し、又、(ニ)(ヌ)を(ヘ)(ニ)の凡そ二分の一にして、(リ)



(ヌ)を左に折ります。其の次には(ル)を下前の(ル)(ヲ)の襞に凡そ重なる位に右に折り、更に(ル)(ワ)の幅を襞斗幅の三分の一位に定めて、(ワ)(カ)を左に折ります。

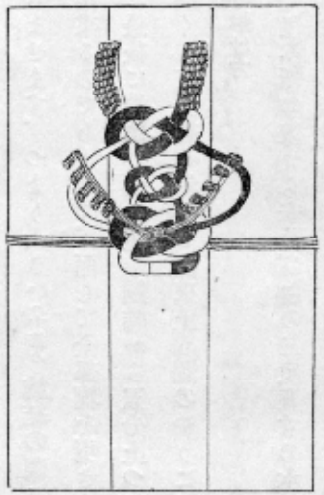
次に(ル)(ワ)の幅の半分位より又右に折れば、第四圖の如くなります。

終りに全體の長さの凡そ三分の一を後に折り曲げます。

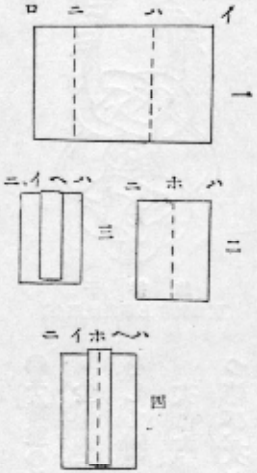
第十課　腹帶包と子持鮑

腹帶包は表の中央に幅の三分の一の襞を折つた包み方で、水引は赤と白の二本で丈の中央を眞結にし、それに子持鮑の飾結をつけたものであります。

折り方及び結び方は便宜上腹帶包としたもので、他のものに應用しても差支ありません。



出來上り圖



㊀材料

(1) 奉書　二枚。

(2) 水引　赤　二尺五寸　一本。
　　白　二尺五寸　一本。
　　金銀　四尺　二本。

㊁紙の折り方

奉書二枚を外表にして重ね、紙を横におき右の方から腹帶を疊んだ幅を二つとり、第一圖(ロ)の線を(ニ)の點線より右向きに折り、次に(イ)を(ハ)線より左向に折ると第二圖の形となります。左端の(イ)を幅の中央(ホ)より右に折り、なほ(ホ)

より(イ)(ホ)の三分の一の所、(ヘ)より左向きに折り返すと折り上ります。

鮑　持　子
(照參圖り上來出は銀金)

㊂予持鮑の結び方

金銀四尺二本の帶を揃へて輕くしごき、十筋で鮑結をして固く締め、裏から糊を引きます。

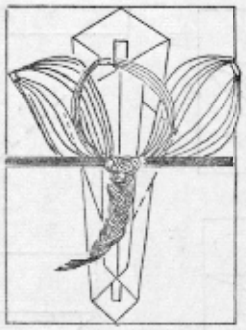
次に内側の左(銀)、右(金)の五筋で小さい鮑結を一つ結び、次に外側の五筋と内側の五筋と一所に最初と同じ十筋の鮑結をします。十筋の水引を平らに並べる時、外側の五筋を圖の如くふくらませます。つまり大きい(十筋の)鮑結の間に小さい(五筋の)鮑結と、左右のふくらみが出來るのであります。而して全部糊を引きます。

最後に端は外側を短く鮑結から五分上つた所まで老の波を卷き、順次に二分づゝ高くして全部を卷くと出來上り圖のやうになります。

㊃附け方

包み紙の後から赤及び白の二尺五寸の水引をまはし(白を上に赤を下に並べる。)鮑結の中央、帶の所の上の穴に出し、眞結をして先は左右とも老の波に卷きます。老の波は下の方を結びから一寸離れた所に、赤白二筋を一しよに卷き、次に矢張り赤白二筋を一しよに三分づゝ長く卷き、順に三分宛離して卷くと出來上ります。

第十一課　出産祝の金包と桃の結び方



男子出産祝金包出來上り圖

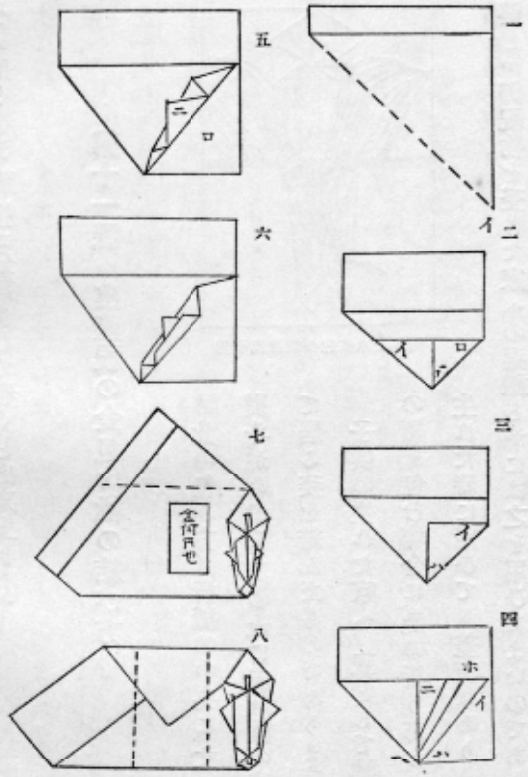
此の包み方は折紙の中央に丈一ぱいの大さの折熨斗があつて、其の上に赤い桃の實が二葉に抱かれて居る姿を結んだものであります。

子供の生れた家へ、祝として贈る金子・商品切手の類を包む場合に、此の折り方をします。又自家で生れた時に用ひても差支はありません。例へば産婆とか御祝物を受けた家への返禮とかには之を用ひてよいのであります。

㊀材　料

(1) 奉書　一枚。

(2) 水引　竹の葉　二尺　二本・赤　二尺五寸　一本。



㊀紙の折り方

紙の表を外に第一圖の如く三角形になるやうに折り(イ)から輪の方へ七寸の所を折り重ねると第二圖が出來ます。次に(イ)と(ロ)と重なる樣に(ハ)の點線から折ると、第三圖となり、(ハ)の中側の折りを外側に折り返して開くと、第四圖の如く四角形となりますから之を熨斗に折ります。

熨斗に折るには、(イ)より(イ)(ニ)の三分の一、(ニ)の方に標をして、これを(イ)(ホ)とし、次に(ハ)より(イ)(ホ)の二分の一を(ニ)の方に標して、これを(ハ)(ヘ)とします。而して、(ホ)(ヘ)を折り、次に(イ)(ハ)の線から更に折り返して第五圖の如くし、第六圖の如く襞を一つ作ります。右側は、左側の折り目に合せて折りをつけ、同樣に折ると熨斗が出來上ります。次に熨斗の長さに、眞直に第七圖の點線の通りに折りますと第八圖の如くになります。

次に熨斗の頭から左に二寸二分の所と、四寸四分の所に筋をつけ、なほ左に殘つて居る紙は右の方に折り、右側の熨斗から二寸二分の所の折目を左の方に折り、熨斗を表に向けなほします。而して左側下前の四寸四分と標した殘りを熨斗の中央迄に、二寸二分の三等分の幅の襞を三つ取ると、丁度三の襞山と熨斗の中心と重なります。

㊁水引の結び方

最初に桃の實をつくります。

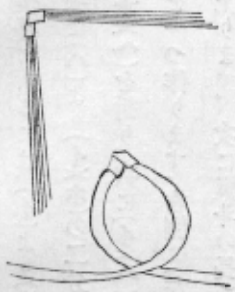
赤の二尺五寸の水引をしごかずに第九圖の如く、帶の眞中から斜に二つ折りにし

て桃の頭をつくり、之を中心として水引の兩端に桃の實の丸みのやうに右手の指先で瓣をつけて、第十圖の如くに右を大きく丸味をつけ、左は稍締め加減にして、左に向つた桃の實をつくり、水引の五筋を平らに揃へて下部の所を元結で堅く結び、裏の方から桃の實に糊を引き、元結は切り捨てずにおきます。

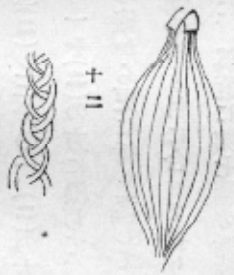
次に桃の葉を作ります。

二尺の竹の葉の水引を帶の中央から眞二つに折つて、第十一圖の如く白の筋を外側にして細長い丸味にしごき白を外に、五筋の葉脈の間隔を同じに、次第に内より外へゆるめ、柔かな丸味のある細長い葉をつくり、其の根元は元結で結んでおきます。

之と同樣にして二枚の葉を作り、左方の葉を上に、右の方



九　十



十一

十二

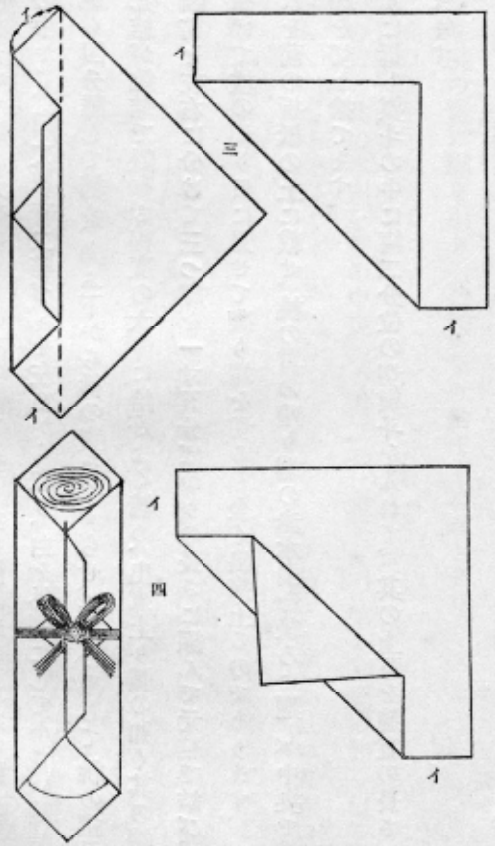
を下にして出來上り圖の如くに重ね、桃の實を抱かす樣に其の上におき、葉の重なり目の所について居る元結のところをのせて、葉と共に固く結び、双葉の殘りの水引二十筋の中から、白一筋、青二筋づゝを左右から取り、白を外側にして小さい鮑結をし、根元から四分離して締め、向ふ下から桃の實をくゞらせ、手前に出して、桃の根元を結んだ元結が鮑結で隱れる程度の大さに恰好よく締め、出來上り圖の如く其の端と、殘り十四筋を左右に分けて三つ編を一寸五分ばかりの長さに編んで元結で結び、左の方に曲げて枝の切り口に見せて殘り端を切ると全く出來上るのであります。

これを前の折紙の上に載せ、桃の實の殘り端の赤水引を後ろに廻し、中央で眞結にして端を切り捨てます。

終りに折り熨斗の中に幅二分位の切熨斗を入れて、其の上下を適宜の長さに切つておきます。

第十二課　卷反物類の包み方と花結

巻反物の包み方



材料

(1) 奉書　二枚　正方形として用ふ。

(2) 水引　金銀　赤白　適宜。

紙の折り方

正方形の奉書二枚を外表に重ね三十八ページに示した圖の如く折ります。中に入れる巻物の大小に依り、寸法は適宜加減して右が上になるやうに重ねて水引を掛けます。

花結の結び方

花結の結び方を説明します。

材料

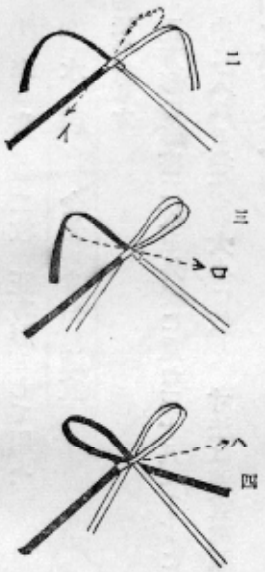
水引　赤白　二尺　二本。

品物の大小によつて水引の長さは加減します。

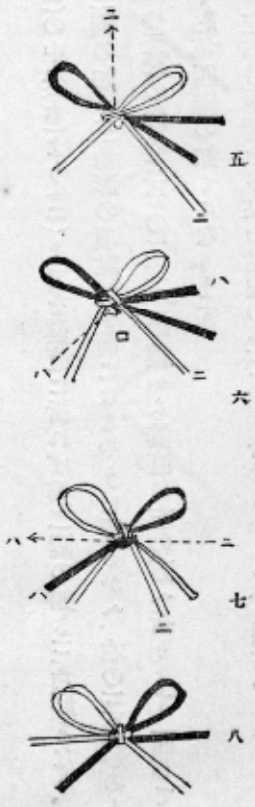
水引の結び方

二本の水引を兩手に持ち、先づ右は赤を上に白を下に、左は白を上に赤を下にして二本並べて縦に持ち、これを左の手にまとめて中央から上の端までが三等分されるやうに右の食指と中指との間に拇指を挾んで丸く折り目をつけます。

次に二本並んで居た左の方の水引が上になり、右の方の水引が下になるやうにして、第二圖の如く十文字に重ね、右の方の水引を點線の如く曲げて輪をつくり、左下の方に斜に引いて下げ、次に左の方の水引も點線(ロ)の如く上に曲げて輪をつくり、右下の方に斜に引き下げます。



次に、第四圖の點線の如く左下の(ハ)の端を、中央の帶が正しく後ろになるやうに右へ曲げ、次に(ニ)の端を後ろへ折ります。此の時後では、二本の帶が十文字に重なります。次に(ニ)を第六圖の如く前側下に引き下し、(ハ)の端を第六圖點線の如く(ロ)の水引の帶の際の輪の中をくゞらせて、左下の方へ拔き出し、第七圖の如く石疊みをつくりますと花結は出來上るのであります。



このまゝですと(ニ)(ハ)の兩端が斜下に出て居ますから、之を點線(ニ)(ハ)の如く兩横に引いて品物に結びつけ易いやうに恰好を整へます。裏に返して見ると第八圖の如く白の輪が左に赤の輪が右になつた十文字の花結となるのであります。之を折紙にかけて裏に眞結に結び、花結及び眞結の兩端を何れも恰好よく揃へて切れば出來上ります。

第十三課　胡麻鹽包

其の一

材料

小奉書　一枚。

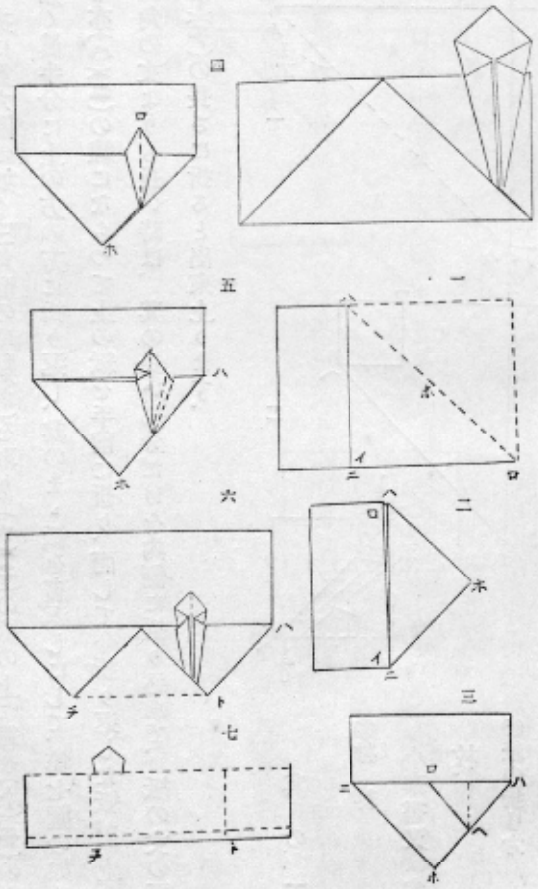
紙の折り方

紙の表を外に、第一圖の(イ)の角を(ニ)に合せ、(ロ)(ハ)の點線を折ると三角形になります。

(ハ)(ロ)の中央(ホ)より(ニ)までを眞直に折れば第二圖の如き三角形となり、之を其の儘第三圖の如く三角形の頂點が手前になるやうに置きかへ、右の三角形の上の(ロ)を取り、(ハ)(ホ)の間の三分の二、(ヘ)の標から眞直に左の方へ折ります。而して(ロ)の輪を開くと第四圖の如くになります。

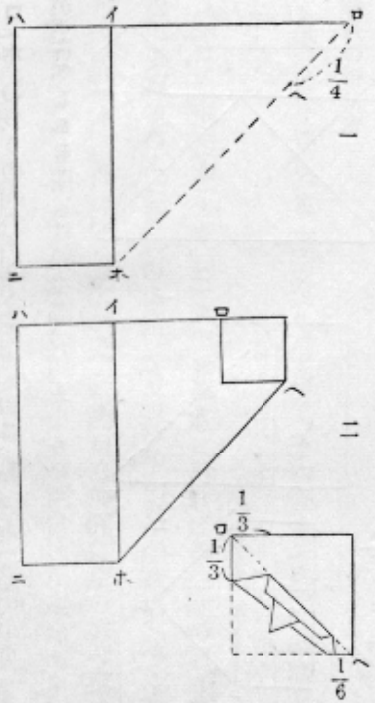
次に左右の兩端を中央の點線の上につき合せるやうに、兩方から折ると熨斗の形

出來上り圖



となります。

次に第六圖の如く三角形の頂點(ホ)を取り、(ハ)(ニ)の線の上に載せ(ト)(チ)の點線の如く眞半分に上の方の方に折り返し、其のまゝ紙を裏返しにして、第七圖の如くこれも亦(ハ)(ニ)の線にならつて上の紙を手前に折り、而して今折り返した紙が、上の方の三角の丈よりも長い時は、其の長い部分だけを內側に折り込んで、紙の丈の兩端を(ト)(チ)の長さに折ると出來上ります。



其の二

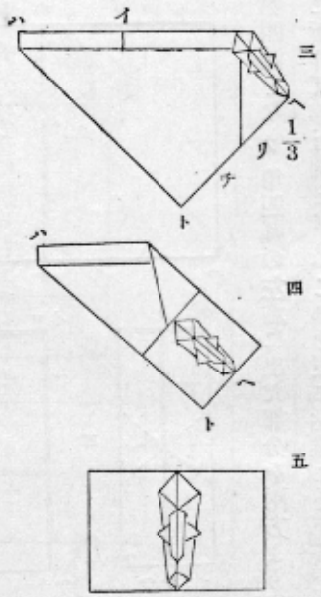
材料

小奉書又は半紙一枚。

紙の折り方

紙を外表に第一圖の如く三角形に折り

(ロ)(ホ)の長さの四分の一より折り、(ロ)點を(ホ)(ロ)の中央にのせると、小さい三角形が出來、これを開けば第二圖の如く小さい四角形が出來ます。



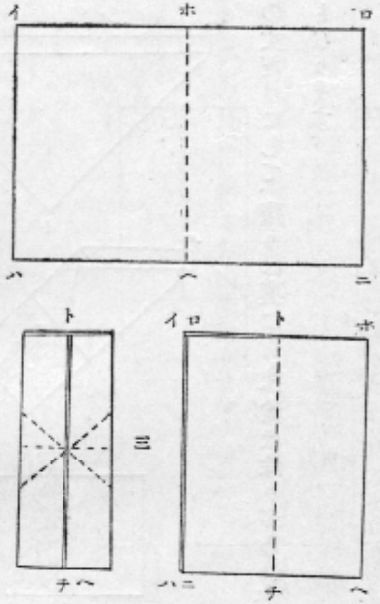
この四角形で熨斗を作り次に(ニ)(ホ)を右に折り(ハ)(ニ)を(ハ)(イ)(ロ)に合せて(この時少し控へ目に。)折ると第三圖となります。

次は(ヘ)(ト)の間を三等分した(チ)の上に熨斗の中心(ヘ)がのるやうに折り、上部は熨斗の丈だけにして、殘りは裏に折り、尙ほ餘りがあれば中に疊み込めば出來上り第五圖となります。

其の三

材料

半紙　一枚。縦と横が六と八の割合なれば形よろし。

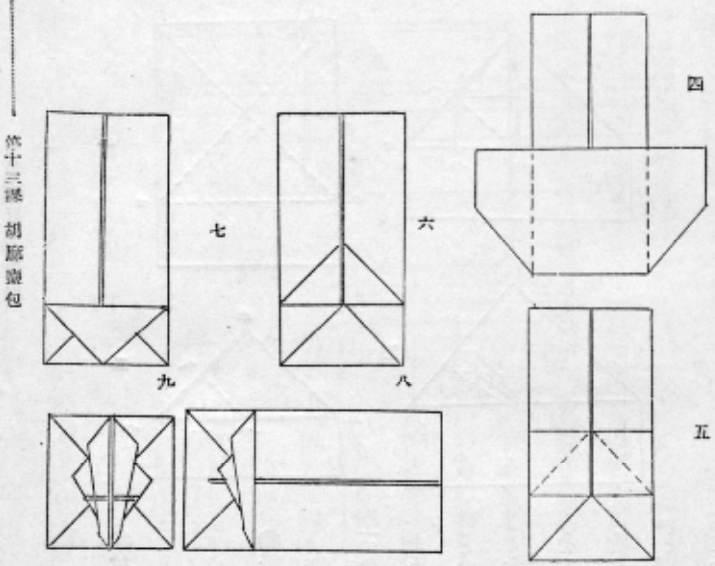


㊀紙の折り方

第一圖點線の所で二つに折ると第二圖の如くになり、更に其の中央(**ト**)(**チ**)を定めて、右の(**ホ**)(**ヘ**)と左の(**イ**)(**ロ**)(**ハ**)(**ニ**)を中央で突き合ふやうに折れば、第三圖となります。

次に第三圖の點線に添ひて二双舟を折る時の如く開けば第四圖となり、第四圖の左右に出た部分を兩方より内側へ折り、眞中で突き合ふやうに折れば第五圖となり、これを更に點線にそひて上の角を三角に、下向きに折り曲げると第六圖になります。

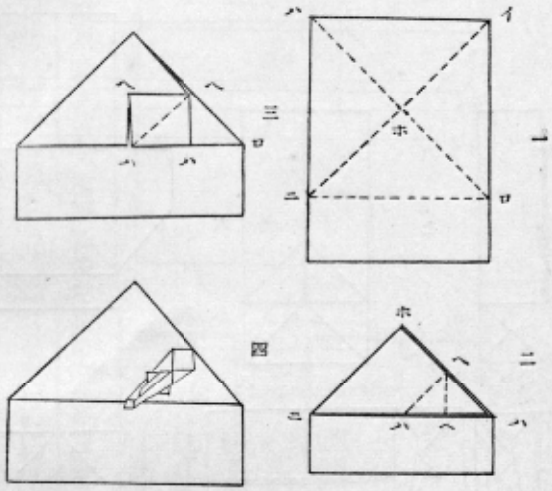
この時、内側になる部分の、輪でない方を、一分幅に鋏を入れておきます。



これは後に熨斗の帶になります。

今、折つた部分を下に折り曲げますと、第七圖の如くになり、他の一方も之と同樣に折り、三角形と三角形の部を熨斗の形に折り、先に切つておいた一分幅のを帶にして、糊で貼りつけますと、出來上り圖のやうになるのであります。

第十四課　きなこ包



㊀材料

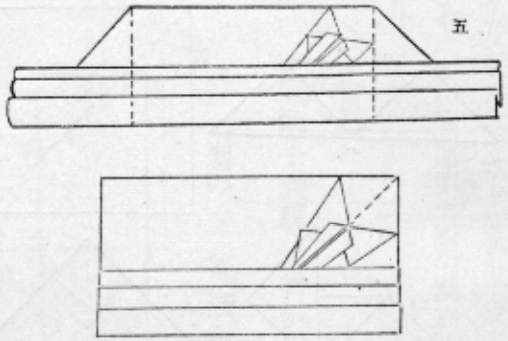
小奉書　一枚

㊁紙の折り方

紙を外表に(**イ**)の角を(**ニ**)の上に載せ三角形をつくり、更に(**ハ**)の角を(**ロ**)の上に載せて折れば、(**ハ**)(**ニ**)(**ホ**)の三角形となります。

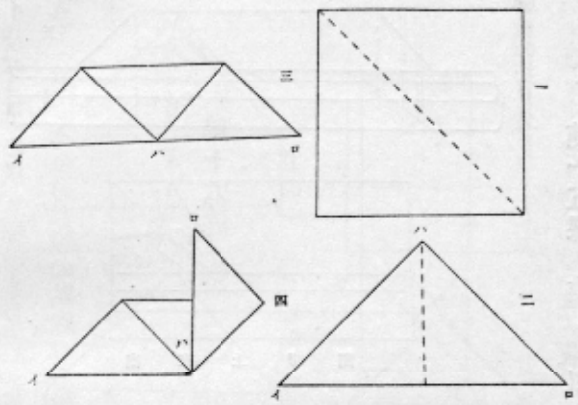
次に第三圖の如く右の方の一枚(**ハ**)を取り、(**ホ**)(**ロ**)の中央の所から裁ち目をそろへて、眞直に左へ折り返しますと、(**ハ**)の角が點線の(**ハ**)に重なるやうになります。

第十五課　山椒包



出來上り圖

次に(**ヘ**)(**ハ**)を中心として、內側に折り込まれてある(**ヘ**)の線を其の儘外に折り出して、第三圖の如く正四角形としてこれを熨斗に折ります。熨斗が出來上つた時には、第四圖の如く熨斗の頭を定規として、上の方の三角を後ろに折り、下の方の殘りの紙を上に折り、これで二つの襞を折ると三段になります。この三段の幅の差は上になる程一分づゝせまくします。次に第五圖の點線で示したやうに一方は熨斗を境に、他方は三角形を境目にして兩端を後ろの方に折ると出來上ります。



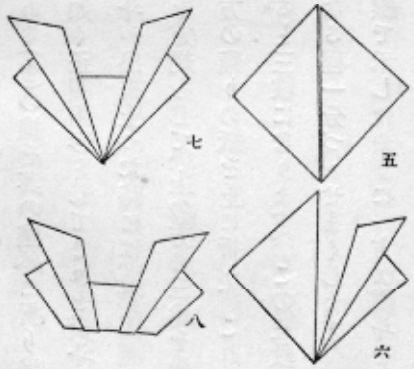
材料

半紙　三寸四角　一枚。

紙の折り方

三寸四角の紙を、先づ對角線の通りに折つて第二圖の三角形とし、(イ)(ロ)を二等分した點に(ハ)を折り重ねますと第三圖となります。

次に右側の(ロ)を上に折ると第四圖となり、左側の(イ)も同樣に折れば第五圖の四角が出來ます。今度は(イ)及び(ロ)の紙を幅の三分の一だけ、表へ折り返しますと、第六圖・第七圖となります。更に之を第七圖の點線から後ろに折り曲げますと第八圖の出來上りとなります。



第十六課　箸　包

其の一　普通用箸包

出來上り圖

材料

半紙　一枚。

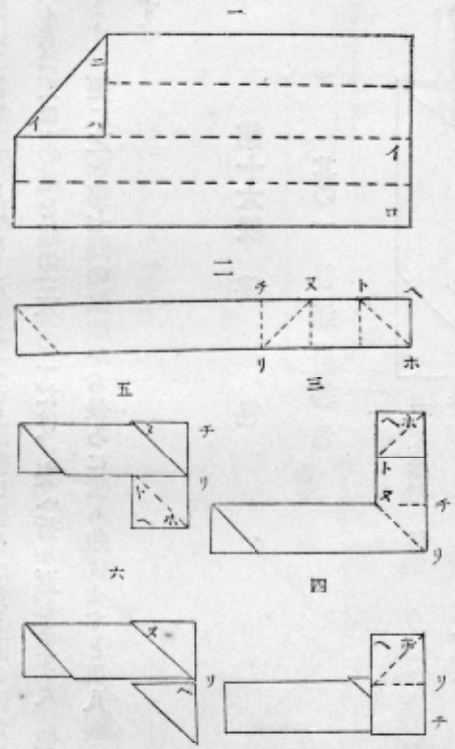
紙の折り方

半紙を丈九寸五分、幅五寸五分に切り、表を外に縦に二つに折つて、其の線を(イ)とし、紙の左の向ふ端を(ニ)(ハ)の如くに折つて、更に縦を四等分しますと、第一圖のやう

になります。而して(ロ)が(イ)に重なるやうにぐる〳〵と四つに巻きますと第二圖の如くになります。

次に(ホ)(ヘ)(ト)の三角を折つて、(ト)(ヘ)の二倍の長さ(ヌ)及び三倍の長さの所(チ)(リ)及び斜の(ヌ)(リ)に折り目をつけると第二圖の點線の如くになりますから、(チ)(リ)を折り、更に(ヌ)(リ)の斜を第三圖の如くに折ります。

次に(ヌ)から裏へ折りかへして、裏から見れば、第四圖の如く、之を表から見れば、第五圖の如くになります。更に、(ホ)(ト)の斜を折り、第六圖の如くにして(リ)(ヌ)にはさむと出來上ります。



箸は出來上り圖に示す如くに入れて、下の三角形の所へは小楊子をさします。

この箸包は凶事の外何れの場合に用ひても差支はありません。水引は略して掛けませんで、祝の場合には壽と赤字で書きます。

其の二　凶事用箸包

出來上り圖

(一)材料

半紙　一枚。

(二)紙の折り方

紙の寸法も、折り方も前と同樣でありますが、普通の場合は最初左の向ふ側を三角に折ります。然し凶事の場合は、左の手前を(イ)(ハ)(ニ)の三角に折ります。而して四つにぐる〳〵巻く場合に、手前から巻かないで向ふから巻いて、手前が最後になるやうにします。其の他はみな同じであります。出來上りは圖の如くで箸を入れる場所の

斜が前と反對の向になります。

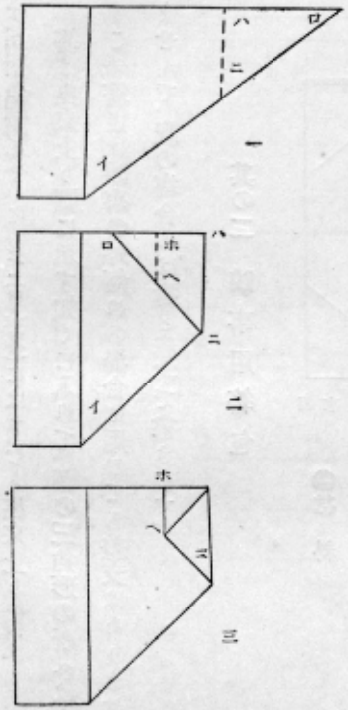
其の三　祝儀用箸包

出來上り圖

一材料

(1) 半紙　一枚

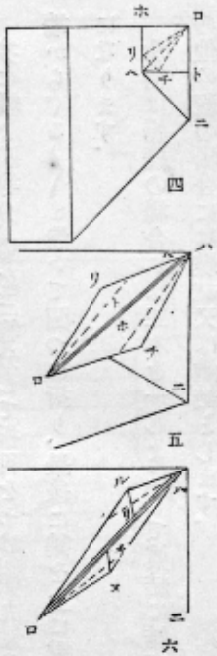
(2) 水引　金銀　一尺五寸　一本。但し婚禮用に限り二本(眞結)を用ひます。

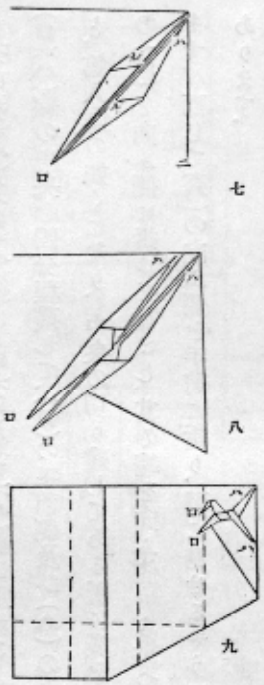


二紙の折り方

紙の表を外に第一圖の如く右の手前端を向ふに三角に折り更に三角の(ロ)から三寸の所を(ハ)(ニ)として折ると第二圖の

三角が出來ます。次に(ロ)を(ハ)に重ねて(ホ)(ヘ)から折ると第三圖の如くになりますから、(ホ)(ヘ)の内側になつて居る折を外側に折つて開くと、第四圖の如く四角形が出來ますから此の四角形で鶴を折ります。





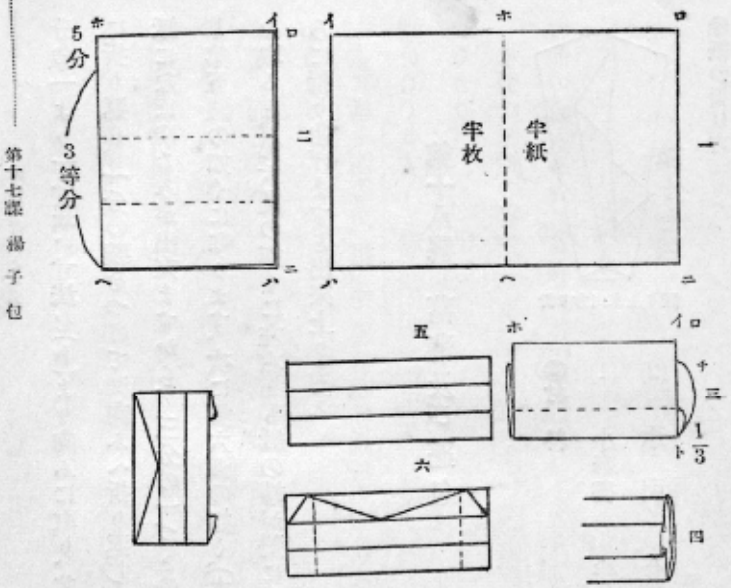
四角形の兩端(ト)(チ)を(ヘ)(ロ)の線上に重ねて(リ)(チ)に筋をつけます。次に第五圖の如く(ロ)を左手前に引くと、(リ)(チ)の線は裏側で、(リ)(ロ)及び(チ)(ロ)の内側に折れて居る線が自然に外側に折れて第五圖の如く菱形となります。

次に(チ)(ハ)を(ロ)(ハ)線に、(リ)(ロ)を(ロ)(ハ)線に重ねると第七圖の如くになります。(ロ)(ハ)線の中央を四分程殘して、(ロ)の手前側及び(ハ)の向ふ側から鋏を入れて切ると、第八圖の如くになり、中央の切り殘してある所に糊をつけて、第九圖の如く手前の(ロ)を向ふ側に折つて首とし、其の端を向ふ側から折つて嘴とし、折裏に糊をつけます。而して(ハ)の向ふ側を手前に折り、羽に見せるやうにすると鶴は出來上るのであります。

次に横を四等分、縦を三等分して折目をつけ、第九圖の如くにし、縦を折り、横は左端からぐるぐると卷いて四つに折り、最後に鶴を上に重ねますと、出來上り圖の如くになります。

水引は婚禮の場合には二本を一しよにして眞結に結び、其の端は老の波に卷き、其の他の祝の場合には蝶結又は鮑結とします。

第十七課　楊子包



材料

半紙　半枚。

紙の折り方

半紙半枚を第一圖(イ)(ロ)の中央點線(ホ)(ヘ)により二つに折りますと第二圖となります。

(ホ)(ヘ)の長さから五分だけ取つた殘りの長さを三分して、(ヘ)(ハニ)を中にして三つ折りにしますと第三圖の通り(ホ)(ロイ)の紙が五分だけ長くなります。

次に五分の長い分だけを、第四圖の如く襞に取ります。襞の取り方は、第三圖(チ)(ト)の長さの三

分の一より一分長い寸法を(ト)より向ふに取り、其の印の通りから(ホ)(ロイ)の紙を手前に折り返し、一分の襞をつけて又向ふへ折り返し、今度は(ロイ)の端を(チ)に揃へると、紙になほゆるみが出來ますから、三分の一づゝの幅にして殘りの弛みを襞に入れると第五圖の如くになります。次に第六圖の如く、(ホ)(ロイ)の紙の眞中へ、縦に一つ斜の襞を取ると、第六圖の如くに左右とも紙の端が斜になります。これを上下五分程づつ後ろに折り曲げますと出來上ります。

第十八課　菖蒲及び蓬包

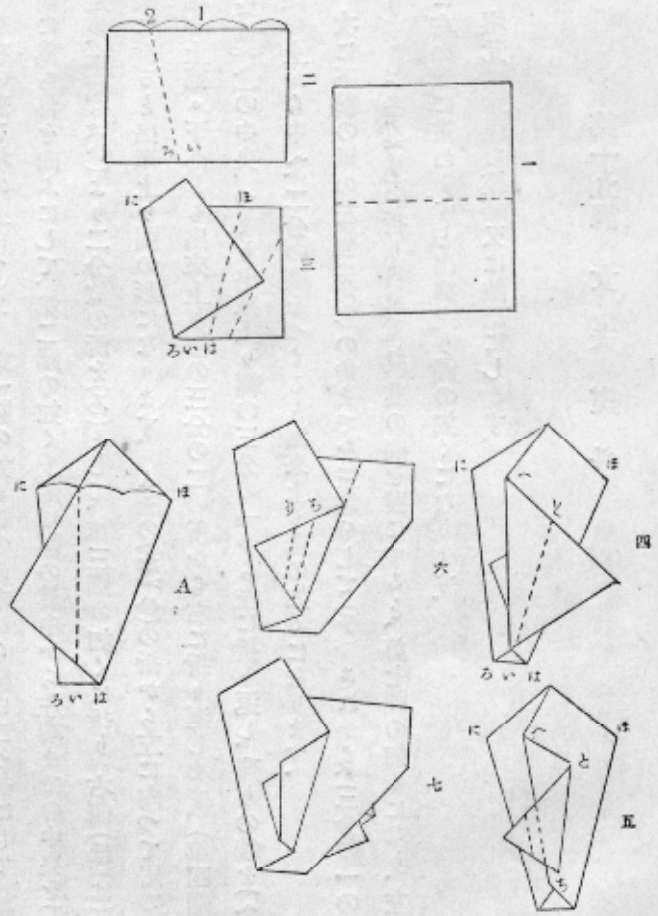
圖ノ上來出方ノ折

一材料

(1) 小奉書　半枚。

(2) 水引　金銀　二尺　一本。

二紙の折り方

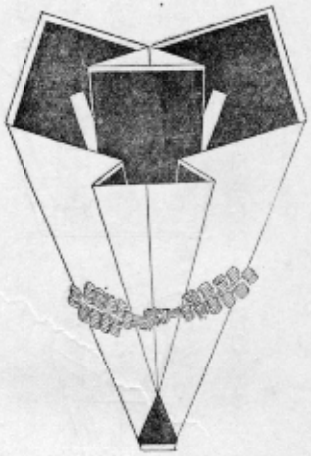


奉書の表を机の上につけて、第一圖の如く紙の眞中から横に二つ折にして、輪を手前に裁ち目を向ふにして、第二圖の如く上部は幅の眞中から左端までの中央を(ニ)と定め、下部は(い)より二分位の所を(ろ)として、第三圖の如くに折り、右側(ほ)(は)も同樣に折ると出來上り圖の形になります。A圖の(ホ)(ハ)の折から左に向つて居る紙の端を上部・下部とも出來上り幅の三分の二の所から右に折り返します。(第四圖)。次に(ほ)(へ)の中央、つまり出來上り幅の三分の一から左に折り返し、殘りの端を(へ)(ち)線の上から中へ、二分の襞をつくると出來上り圖の如くになります。

次に下前の紙の左端三角形の角までを三等分して(チ)、それから、三分の一の所を(リ)として(チ)(リ)の折り目を重ね、其の間を襞にすると、第七圖の如くになり、左を下に右を上に重ねますと出來上り圖の如くになります。

根元は水引で蝶結又は鮑結にします。

第十九課　女夫熨斗



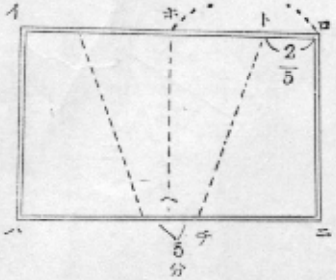
出來上り圖

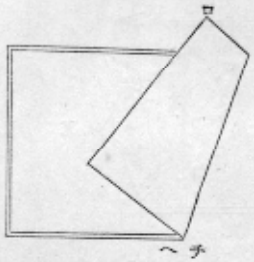
一材料

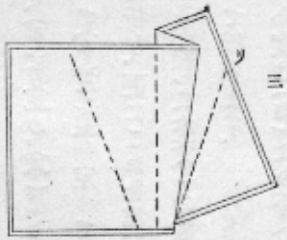
(1) 奉書　半紙。
(2) 赤紙　半紙。
(3) 水引　金銀　一尺五寸　二本。

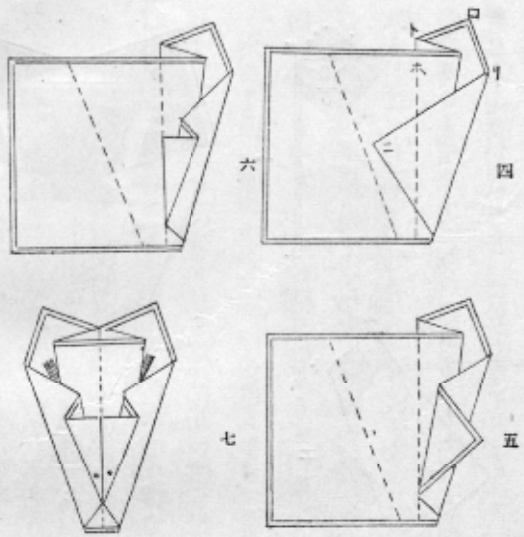
二紙の折り方

奉書半枚に、それよりも周圍一分狹い赤紙を外表に重ね、中央を輕く糊でとめます。而して紙を縱に眞二つに折り第一圖の如くに中央の筋(ホ)(へ)を定め、









次に（ホ）（ロ）の五分の二を（ロ）より取り、（ト）を定め、（ヘ）より右へ五分を取つて（ト）（チ）線を定めて第二圖の如くに折り、更にこれを第三圖の如く（ト）（チ）の線を（ホ）（ヘ）の線のうしろに揃へて折ります。

今度は（ロ）より下へ（ト）（ロ）と同寸だけ取つて（リ）を定め、下は紙一ぱいの所で（ニ）の紙を左に折り、更に（ニ）の紙を第五圖・第六圖の如く屏風折りにして、（ニ）の點が中央にのるやうに折ります。左部の紙も同樣に折れば第七圖が出來、これに三分幅・長さ二寸位の切り熨斗を第七圖の如くつけると出來上ります。

水引は出來上り圖の如くに折紙の下から二寸程上つた所、即ち第七圖の●印の所へ裏から金銀二本を通し、表で眞結を一つして端は老の波に巻きます。

第二十課　目錄包と龜結

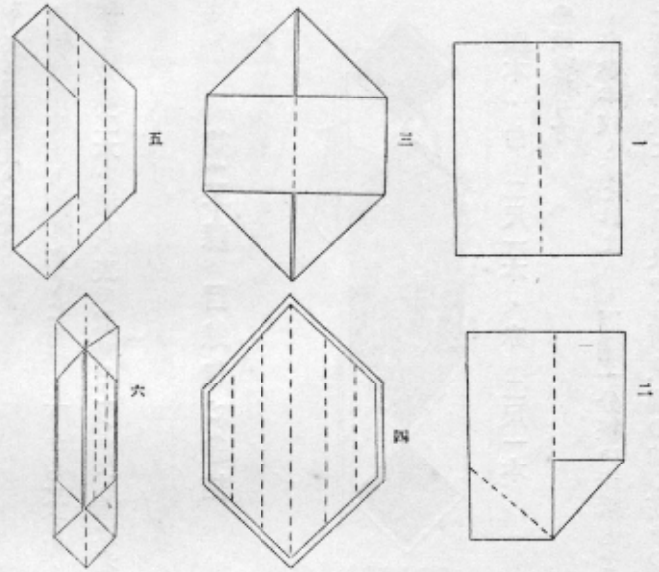
出來上り圖

㊀材料

(1) 奉書　半枚。
(2) 赤紙　半枚。
(3) 水引　金銀　一尺五寸
四本・白　二尺一本・赤　二尺一本。

㊁紙の折り方

奉書半枚と、それよりも周圍一分狹い赤紙とを用意し、先づ奉書を第一圖の如く縦に置き外表にして中央から折り、圖の如く筋をつけ、其の筋を中心にして第二圖の如



く隅を三角に折り、つゞいて左下の點線の如く四隅を三角に折ると第三圖の如き形となります。

以上の如く赤紙と奉書とを別々に折り、外表にして赤紙を奉書の上に重ねますと、奉書が赤紙の周圍へ縁をとつたやうに出て、第四圖の如くになります。

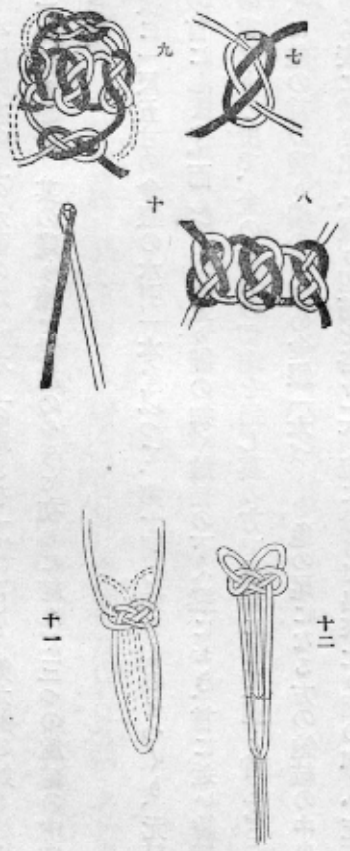
次に、中央の筋から左右への幅から五分引去つたものを三等分し、中央から三分の一の筋の通りで第五圖の如く左の紙を右へ折り、次の筋の通りから又左へ折ります。これと同じ方法で右側の

ると第六圖になります。今度は上に出た三分の一を更に出來上り圖の如く襞を取つて左右同じやうに折ります。

㊁水引の結び方

金銀一尺五寸の水引二本を輕くしごき、金銀がたがひちがひに出るやうに二本鮑を結び、第七圖の如く細長くしめます。

次に二本鮑の左右の兩端で一つ宛鮑結をつくり、第八圖の如く鮑結を三つ並べま



す。今度は左の上の水引の端と、右上の端とを一組にして、第九圖の如く鮑結を上下に一つづゝ結び、其の殘り端を點線のやうに初めに結んだ三つの鮑結の中に引き込みます。

次に一尺五寸の金銀の水引一本を以つて、第十圖の如きものをつくり、元結で結び龜の首にします。而して出來上り圖の如く鮑結の下へ縱におき、首に近い鮑結の十の字の重なりの所で、金の水引の切端を通し裏の方で眞結にして、胴と首とをとめます。

次に龜の首の殘り端の中側の金銀一本づゝを龜の尾になる方の鮑結の中央の穴の裏から表に拔き出し、殘り四筋を各々二筋宛に分けて出來上り圖の如く、左右二ケ所から拔き出し、中央の二筋を中心にして左右に丸味をつけ、左の端を下に右を上に重ねて元結で結び、其の端を二分殘して切り捨て、ほつれぬやうに糊をつけておきます。

今度は金銀一尺五寸の水引を二筋だけ帶からほぐし取つて、中央の金銀の帶より二つに切り、第十二圖の如く一筋の鮑結を結び、其の兩端を圖の如く後に折り曲げ、四本を一纏めにして五分程下つた所を元結でくゝりますと、足が一つ出來ます。而して金銀二つ宛の足をつくります。

此の足を龜の甲の四隅の丸味の所へ、首と同樣の方法で水引の切端で結びつけ、殘りの端は切り捨てます。金銀の足の組合せ方は、龜の左の前と右の後とを銀にし、右の前と左の後とを金にします。

以上で龜の結びは出來上つたのですから、甲の背に丸味をつけ形を整へ、出來上り圖の如く白と赤の二尺を白を上に赤を下に並べ、折紙の後ろからまはして前で眞結をして、其の殘り端は上の方で大きく輪にして恰好よく結び、出上り圖の如く眞結の上に、龜を手前向きに匂はせて、外から見えぬやうに元結でつけます。元結は龜の甲の裏にある首の水引の端に結びつけて止めます。

第二十一課　末廣包と蝶結

末廣包は結納・婚禮に關して扇子を贈る時に包む折紙で、蝶結は其の上にかける水引の結び方であります。蝶結は二本鮑の應用の一つであつて、目出度い場合には何處へ用ひても宜しいのであります。

出來上り圖

㊀材料

(1) 奉書　半枚。
(2) 赤紙　半枚。
(3) 水引　金銀　二尺五寸　二本。

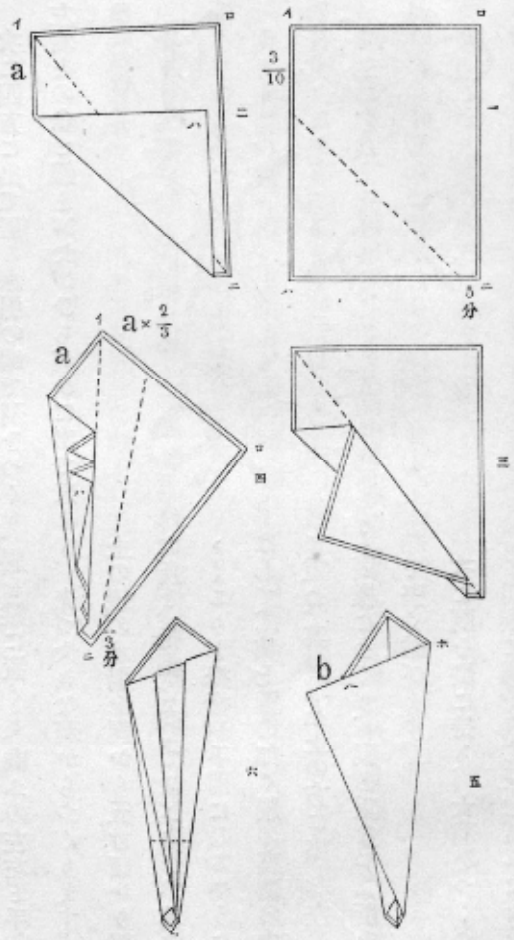
㊁紙の折り方

奉書半枚に、それよりも周圍一分狹い赤紙を外表に重ね、中程に糊をつけて二枚の紙のづれないやうにしておきます。

第一圖の(イ)より下へ丈の十分の三を標し、(ニ)より左へ五分を取り點線に從ひ(ハ)を右へ折ると第二圖となります。

(ハ)を(イ)(ニ)の對角線上より左へ折り返し、第三圖となし、殘りを四等分して第四圖の如く屏風折にします。

次に(イ)より右へ(a)の長さの三分の二を取り、(ニ)より上へ三分を取つて(ロ)を左へ折り第五圖を作ります。而して第五圖の左に出た(b)を二等分し、襞の疊み込みと

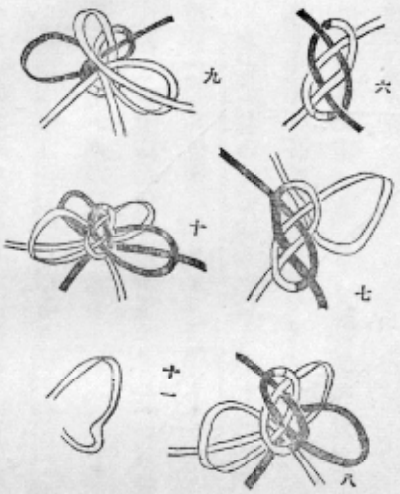


し(ホ)(ヘ)を三等分して、第六圖の如く三つの襞を取り、總丈の三の一(第六圖の點線)だけを後ろに折ると末廣がりの熨斗形のものとなります。

㊂蝶結の結び方

金銀二尺五寸の水引二本を輕くしごいて、兩方の金銀がたがひちがひに出るやうに、二本鮑を結び、水引の帶の所を鮑結の兩横にして第六圖の如く細長く堅くしめ、之を縦におきます。之が蝶の胴となるのであります。

次に四方に出て居る水引の端で羽をつくり、胴を縦に置くと、向ふの左右と手前の左右との金と銀とがたがひちがひに出て來ます。先づ大きな羽からつくります。右上の銀の水引を胴から五寸ばかり離れた所を、拇指を向ふにして持ち、其のまゝくるりと拇指が手前になるやうにまはして、第七圖の如く胴の裏側の中央に重ね、其の端を上の方に出し、左の羽も同樣につくり、胴と重なつた所を元結で堅く結びます。



次に胴を倒に持ち、大羽をつくつた時と同樣に胴から約三寸離れた所を持つて輪をつくり、第八圖の如く其の端を胴の中央から眞直に横に出します。之を裏から見れば第九圖の如くになります。

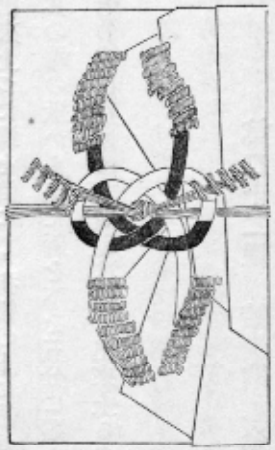
次に第十圖の如く左右の小羽をつくり、大羽を結んだ元結で結びます。大羽を胴から約二寸離れた所と、尾から五寸離れた所とを少しそらし、第十一圖の如く尖らして角を立てるやうにしますと、出來上り圖の如き美しい形の羽となります。

次に大羽の殘り端を出來上り圖の如く、中央を短く、凡そ五分位に、左右の端になるほど次第に長くして、老の波に卷き觸角を作ります。

出來上つた蝶を倒にし、折紙の上に載せ、小羽の殘り端を裏にまはして眞結に結び、其の端の紙から出た所を下を五分に順々に上を二分づゝ長く八の字形になるやうに老の波に卷けば末廣包は全く出來上るのであります。

第二十二課　結納金包

結納の品の代りに金を贈る場合には左圖のやうにします。



出來上り圖

㊀材料

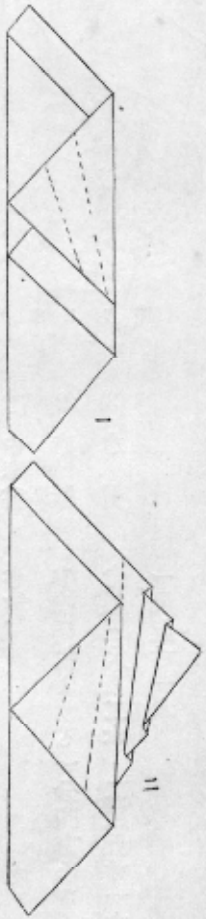
(1) 奉書　二枚。
(2) 水引　金銀　二尺五寸　四本。
　　白　二尺五寸　一本。
　　赤　二尺五寸　一本。

㊁紙の折り方

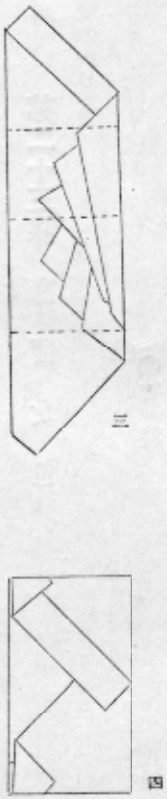
奉書二枚を外表にして重ね第一圖の如き形に折ります。これは帶料包の第一圖と同じであります。

次に第一圖點線の如く三角形の所を三等分して筋をつけ、第二圖の如く二三分の重なりをつけて折り、下の三角形も同樣の方法で折ると第三圖の如くになります。

次に丈の中央から上下へ四寸二分乃至四寸五分の所に筋をつけ、下の端を先に、上の端を後から裏の方へ折ると出來上り圖の如くになり、裏は第四圖の如くになりま



一　二



三　四

㊂水引の結び方

金銀二尺五寸の水引四本を輕くしごき、二本宛重ねたまゝ、金銀の水引の端がたがひちがひにならぬやう、金と金・銀と銀が揃ふやうに二本鮑を結びます。出來上り圖で見るやうに折紙の幅よりも少しく幅を狹くして、横長い恰好にしめます。而して形がくづれないやうに裏から糊を引き、糊が乾いた時上下左右の端を老の波に卷きま

す。

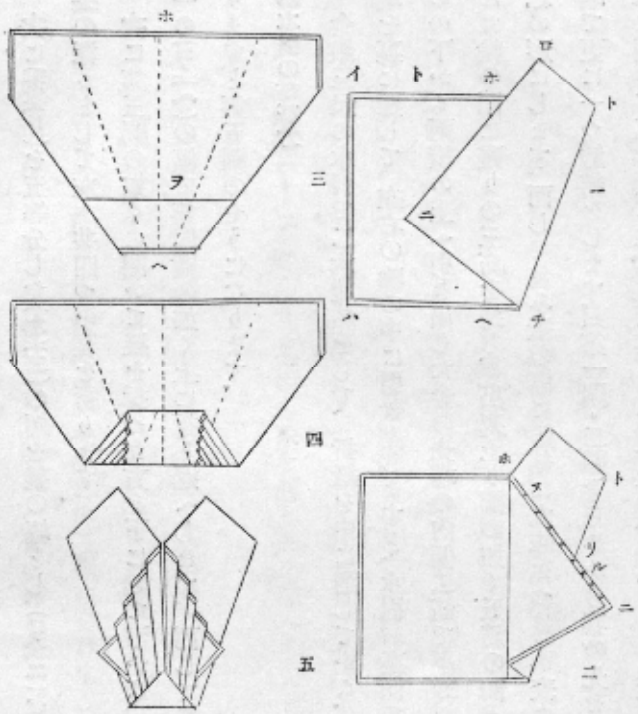
次に品結の白二尺五寸の水引と赤二尺五寸の水引とを、白を上に赤を下にして並べ、折紙の後ろから前に出し、出來上り圖の如く二本鮑の左右の輪の中へ通し、折紙の中央で眞結にして、其の端を白を内側に赤を外側にして二本同時に卷くと出來ります。

第二十三課　壽留女包

出來上り圖

一材料

(1) 中奉書　半枚。
(2) 赤紙　半枚。白よりも一分四方小さく。
(3) 水引　金銀三尺　二本・二尺五寸一本・一尺五寸一本。



二紙の折り方

中奉書の半枚に一分狹い赤紙を重ねて中央を一寸糊でとめて置きます。而して第一圖の如くに紙の横を二つに折つて(ホ)(ヘ)とします。次に(ホ)(ロ)を五等分して其の五分の三を(ホ)(ト)とし、(ヘ)から五分の所を(チ)として、(ト)(チ)を折り

ます。而して片方も同様に折つて、中央の(ホ)(ヘ)の線から折り返へします。

次に(ホ)(リ)を五等分した(ホ)(ヌ)の幅を襞の幅とし、(リ)(ニ)を四等分した(リ)(ル)を襞の深さとして左右共四つの襞を折ります。

次に第三圖の如くに開いて襞を折つた方を下にして下から(ホ)(ヘ)の長さの五分の一の(ヲ)(ヘ)の幅で第四圖の如く上に折り返へします。而して先に開いた所を再び折りますと第五圖のやうになります。

㊁水引の結び方

金銀三尺の水引で二本鮑結をして、折紙を中に通してから、左右の金の水引の兩端を裏に廻して、左右の輪の中に引き出しますと、水引が裏側で十文字になります。この下から兩横の上へ引き出した金の先端の内側二筋で小さい鮑結をなし、其の結んだ輪の間に殘りの三筋を通し、出來上り圖の如く五筋の間を二分位づゝ明けて寶珠の形にします。而して包み紙の幅に鮑結に丸味をつけて、表に出て居る鮑結の銀の端で更に一つ鮑結をします。(第一圖・二圖)。それから其の先を内側を二本・外側を三本に別けて、内側の二本で輪を拵らへて、上で一つからめて置きます。

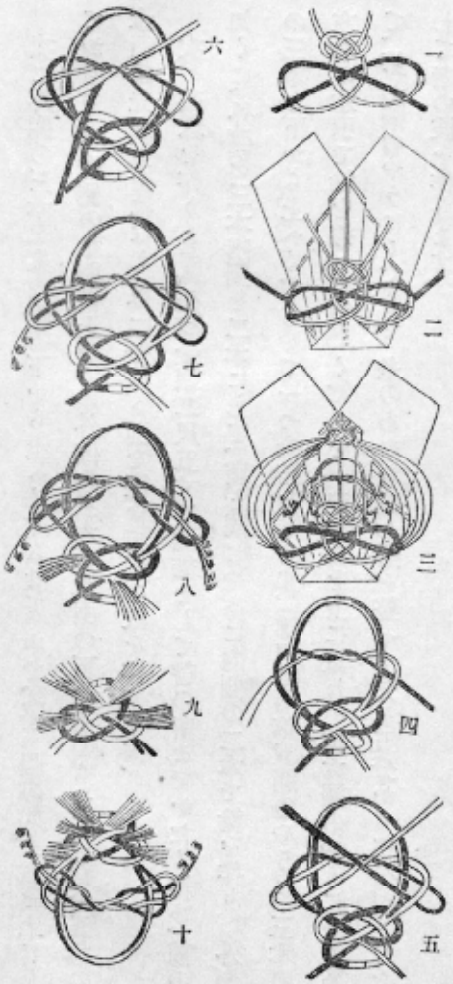
次に外側の三本を先の輪の下から上へくぐらせて、中で、第三圖の如く右を上にしてからめて、内側の水引の上から、外側の三本の水引の下にくぐらせて、都合五本の水引の先を五分はなして、二分づゝ間を置いて老の波を作ります。

次に寶珠を作ります。先づ金銀二尺五寸で鮑結をして帶の所までかたく締め、前の如くに、外側を三本内側を二本にして、前と同じやうに内側の二本で輪を作り、外側の三本を下から上へくぐらせて一つ輪結をします。(第四圖)。第五圖のやうに、三本の左右の水引で輪を拵へて下にくぐらせ、中で右を上に重ねて第六圖のやうにからめて、第七圖のやうにくぐらせ、糸のあやを直し形を整へて先を五分から二分づゝはなして老の波を作ります。

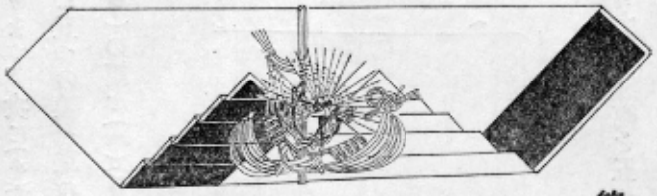
次に金銀一尺五寸の水引を四つに切つて、金銀混ぜて二十筋の水引を、金四筋と銀三筋の七筋のものを一組と、其の反對に金三筋と銀四筋の七筋のものを一組と、金銀何れも三筋づゝ合はせた六筋のもの一組との三組に分けて、先づ七筋の一組を第八圖のやうに通して、次に七筋を反對の側から先に通した七筋と裏で十文字になるやうにします。(第九圖)。

次に第十圖の如くに、六筋の一組を初めの七筋と後の七筋とが十文字に交叉して居る裏側を跨らせて通し、此の針のやうな二十筋の水引の長さを揃へて切り、御光のさした形にします。

次に其の寶珠を出來上り圖の如くに、二本飽結の銀の鮑結の上側に銀の水引で結びつけますと出來上ります。



第二十四課　子生婦包



出來上り圖

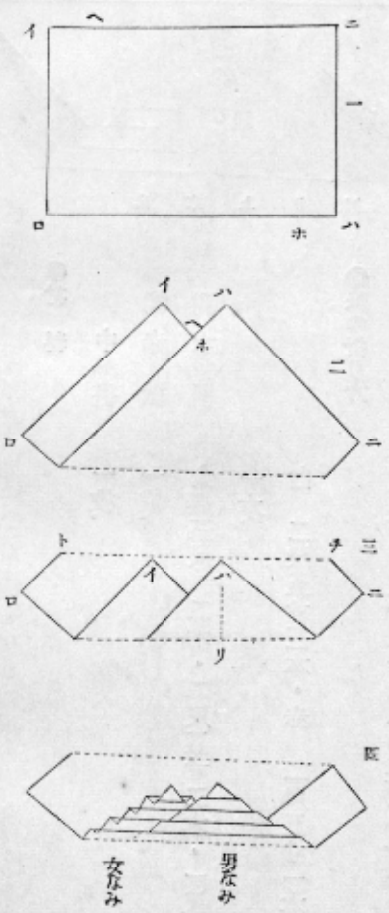
一　材料

(1) 中奉書　一枚。
(2) 赤紙　一枚。
(3) 水引　金銀三尺　二本・二尺五寸二本・一尺五寸一本。
白　二尺五寸三本・赤　二尺五寸一本。

二　紙の折り方

中奉書に四方一分狹い赤紙を重ねて、中央に一寸糊をつけて折ります。先づ第一圖の如くに置いて、紙の横の寸法から縱の寸法を引いたもの、二分の一の寸法を(イ)(ヘ)と(ハ)(ホ)に標して其の(ヘ)(ホ)を重ねますと、第二圖の如くにな

ります。次に(イ)(ハ)の角を(ト)(チ)の線に重ねて(第三圖)、(ハ)(リ)の幅の三分の二の間に五つの襞を重ね女波・男波の形を現はします。襞の幅と深さの割り出し方は(ハ)(リ)の幅を(ハ)(リ)の三分の二の幅の襞の數の五で割つたものが、襞の幅となり、(ハ)(リ)から襞幅を五つ取つた殘りを四で割つたものが、襞の深さとなります。



次に赤紙の出て居る方を女波として、襞を男波の襞と反對に第四圖の如くに折ります。

㊂水引の結び方

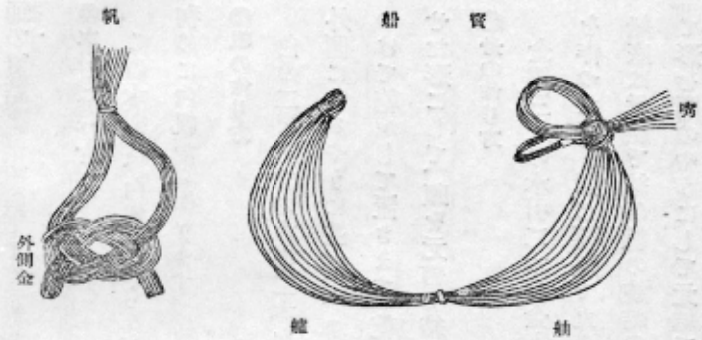
この水引は、白帆をはらんだ寶船に、寶珠の玉を載せたものでありますから、先づ初めに白帆から作ります。

㊁帆の作り方

白の二尺五寸の水引二本を別々にして、それに二尺五寸の金銀の水引一本を、金の外側になるやうに並べて、帶の所から二つに折つて、二本鮑結をして、裏側から糊をつけて乾かして置きます。乾いたなら、其の殘りで圖のやうに帆の右側を風をはらませた形にして、頭を元結で結びます。

㊄舟の作り方

金銀三尺の水引二本を金と金・銀と銀とを重ねて帶の所から二つに折つて、竹の葉を作つた時と同じ要領で丸みを持たせて、全部一しよにしごいて、舟の艫を作ります。船底は元結で結び帆の鮑結の帶の所に通してから、舟の舳を艫と同じやうにしごいて形を圖のやうにして元結で結びます。水引の殘りで舳の頭に凡そ直徑五分位の丸



みで輪を作り、水引の金と銀を以て、軸の先をはさんで、又一所に寄せて結んで一寸位殘して水引を切ります。

次に二尺五寸の金銀の帆に用ひた殘り三筋の銀ばかりで鮑結をして軸の烏の嘴に型つた所に鮑結の輪を通して、先を七・八分後に輪を出して、後側で結んで置きます。

六 寶珠の作り方

寶珠の作り方は、壽留女包に用ひたものと全く同じであります。

以上のものが出來上りましたら、帆の鮑結の上部に結びつけ、包み紙に赤の二尺五寸の水引と、白の二尺五寸の水引とを二本並べて包み紙の一の波の上あたりに逆の眞結をし、包み紙の位置を横にして、又普通の眞結を一つします。而して其の先を白帆の鮑結の中央の穴に通して波の上に船をのせ赤を下に白を上にして、下を一寸殘して間・間を三分づゝ離して卷きます。

第二十五課　勝男武士包

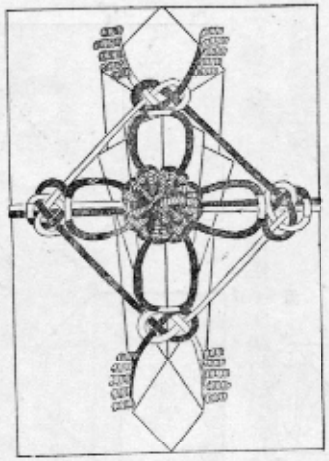


圖　出來上り

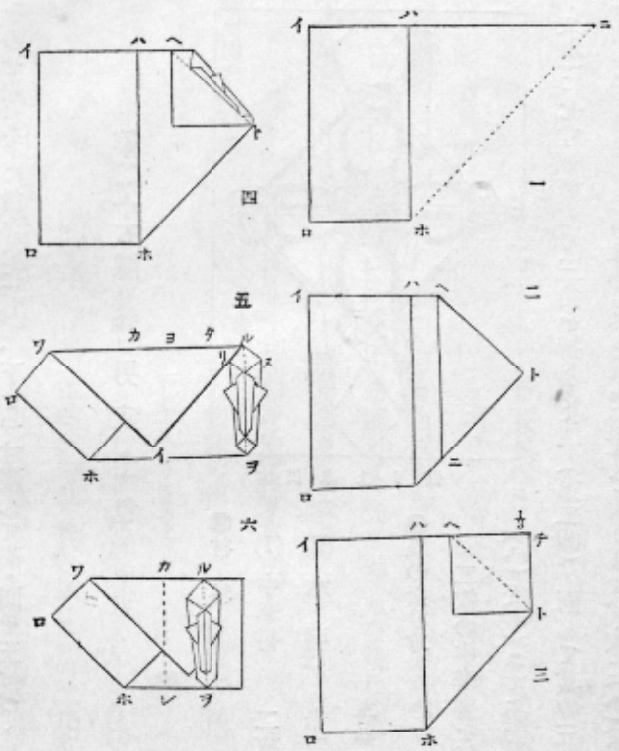
一 材料

(1) 中奉書　二枚。

(2) 水引　赤二尺四本・金銀二尺五寸二本・二尺二本(品結)。

二 紙の折り方

二枚の中奉書を外表に合せ、紙の端(**ハ**)を(**イ**)(**ニ**)に重ねて、(第一圖)。(**ニ**)から(**ホ**)に七寸を標して三角を折ります。(第二圖)。而して其の三角を第三圖の如くに開いて四角なものを作つて、それで鬚斗を折ります。次に(**ヘ**)(**チ**)の長さの三分の二

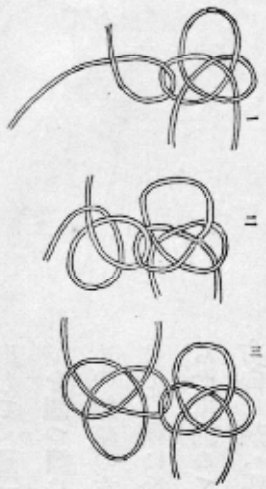


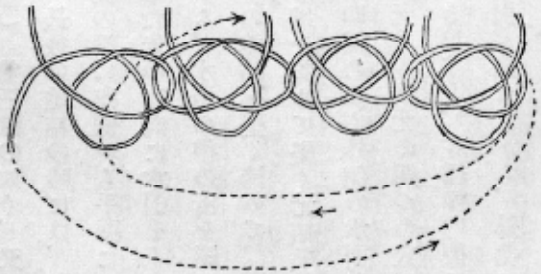
を熨斗の上の幅とし、六分の一を下の幅として中央の(**ヘ**)(**ト**)の線に重ねて折り返へしてから襞を取ります。襞は上下共熨斗幅の半分の寸法から折つて、形を見て襞の深さを定めて、左の半分も同樣に折ります。次に熨斗

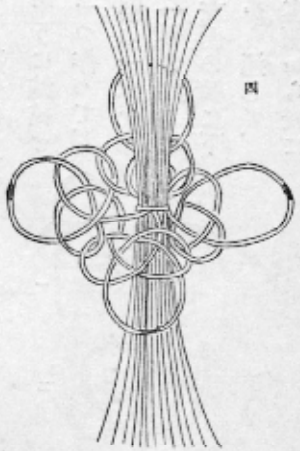
の長さ(**ル**)(**ヲ**)を計つて、(**ホ**)(**ワ**)の長さをそれと同寸に折つて、(**リ**)(**ヌ**)の長さを(**ル**)から左へ三つ取り、(**タ**)(**ヨ**)(**カ**)と標します。(第五圖)。而して(**タ**)から(**ル**)(**ヲ**)に平行に内側に折り返へして、熨斗を開きます。(第六圖)。次に第六圖の如くに(**カ**)(**レ**)を折ると出來上り圖のやうになります。

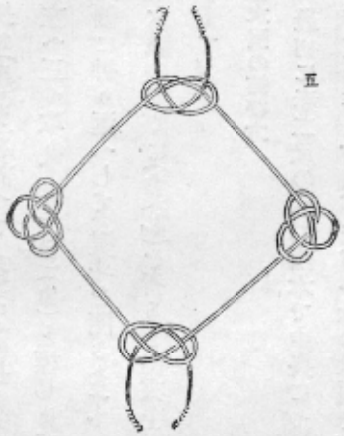
㊂水引の結び方

最初に赤二尺の水引四本で中央につける花を作ります。花の作り方は、先づ一本の水引で帶が花瓣になるやうに鮑結を一つ作つて、別の一本を第一圖の如くに左側の輪に下から通して、裏側から表に






四

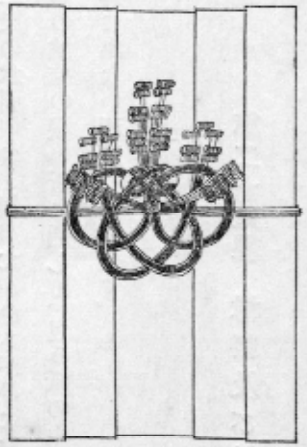

五

出して、（第二圖）第三圖の如く、又鮑結を四つ續け、最後の鮑結の時には、初めの鮑結の右側の輪に向側から手前にかけて、圖に示した矢の方向に水引をくぐらせて締めてから、水引の帶の所を同じ方向に揃へ四つの鮑結を堅く締めて、四本の水引全部の端を集めて堅く元結で結びます。次に第四圖の如く外側の水引を五本づゝ別々に元結の根元の四つの穴に入れて裏側に引き出すと、花瓣の內側に二十本づつの水引が出ますから、外側に出したものを又元結で花瓣の際を堅く結びます。而して其の先を結目から二三分で切ります。內側に出した二十本の水引は出來上り圖の如くに一本づゝ、根元迄卷いて蕋の形を作ります。

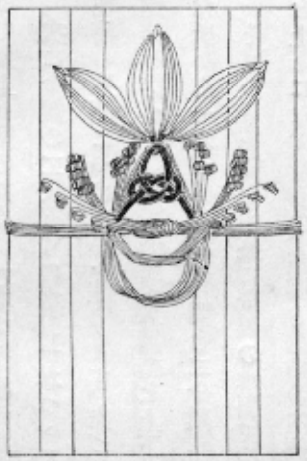
次に金銀の二尺五寸の水引一本づゝで鮑結を結び、其の先と先とで又鮑結をして花瓣の外側につける枠を作ります。先づ一本宛で帶の所を中心として、兩側に二つの鮑結を作つて、結び殘りで又鮑結を上下に一つ宛作つて、水引の端は外側を五分離した所から一本づゝ別々に、間を二分離して五本とも卷きます。（第五圖）

それから花瓣を中央に金銀の水引で作つた枠を外側にして、水引の卷いてある方を上下になるやうに、花瓣と鮑結の內側とを元結又は銀の水引で結びます。次に金銀二尺の水引の金と銀がたがひちがひになるやうに帶を揃へて、先に作つた花瓣の左右の鮑結の根の所に通して、包み紙の中央にかけて裏側で眞結をして、兩端は折紙の外に出ない程度に切ります。

第二十六課　樽料及び肴料包



樽料包出來上り圖



香料包出來上り圖

㊀材料

(1) 大高　二枚。

(2) 水引

(イ) 樽料包　青　二尺五寸二本・銀二尺五寸一本・赤同一本・白　同一本。

(ロ) 香料包　竹の葉　二尺五寸三本。赤　二尺五寸一本。白　二尺五寸一本。

㊁紙の折り方

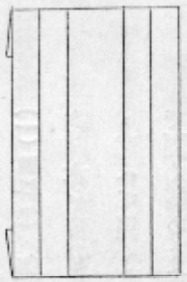
(一) **香料包**　紙の表を外に第一圖の點線に從つて二つに折り、(イ)を(ロ)に、(ハ)を(ニ)に重ねて第二圖の如くにし、第二圖の(ホ)(ヘ)(輪の方)を(ロイ)(ホ)の三分の一の所の點線(ト)(チ)から折ると第三圖となります。

次に、(ト)(ロイ)の間の三分の一を(ト)より取れば(ト)(ホ)の間に於て、先に折つた紙が少し殘りますから、この殘りの分だけを襞にして(ト)(ホ)が丁度(ト)(ロイ)の三分の一だけになるやうに、三つに襞取りして疊むと第四圖になります。

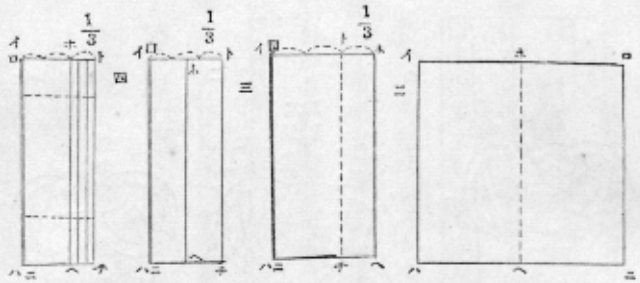
右と同じものを別にもう一つ折り、二つを兩方から向き合ふやうに右を上に左を下に重ねて、上部と下部を出來上り幅の三分の一だけ後ろに折り曲げます。

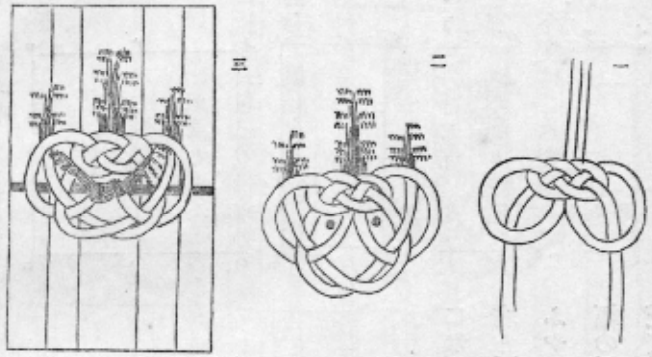
(二) **樽料包**　樽料包は香料包と殆んど同じ折り方で、たゞ

香料包折り上り圖



樽料包折り上り圖





異る第四圖の裝の折り方の三つを二つにするだでけ其の他は全部同じであります。

料金は上に重ねる方の紙の間に入れておきます。

㊂水引の結び方

(一)祝料包　銀の二尺五寸を一筋づゝに離して、内四本を青の水引二本の各〻の兩側に、一本づゝ添へて輕くしごき、二本鮑結を結び、帶の中央で固く締めます。

次に左右に出た水引二本づゝの中、上部の二本で左右から第一圖の如き輪を作り、其の端を鮑結の下にして鮑結と一しょに元結で結び、而して裏に糊を引きます。

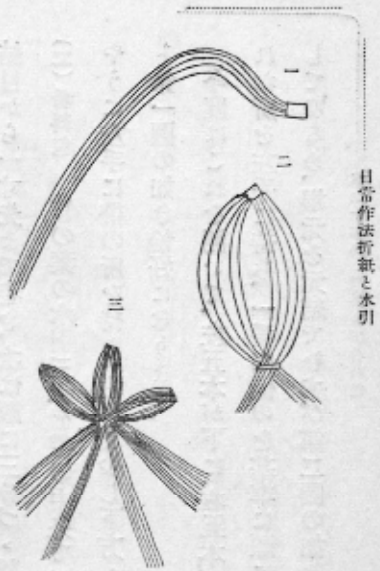
今度は下に殘つた左右二本の水引で下の輪を作り、前に作つた輪の間を第二圖の如くにくゞらせて、端を上に出し輪を桐の葉の形に整へて裏に糊を引きます。

次に上に出た各〻の端をそれ〴〵圖の如くに老の波に卷くのですが、之は五三の桐の花の心持で、外側を低く順に内側を高くします。

以上出來ましたら赤及び白の二尺五寸の水引を白を上に赤を下に、二本並べて先に折つた包紙の後ろからまはして、出來上り圖の如くに第二圖の桐の葉の・印の所へ出して眞結をし、其の端で左右とも赤白二本づゝで老の波を卷きます。此の時下のは結目から一寸先まで卷き、次は順に三分づゝ離して卷きます。

(二)肴料包　竹の葉の水引三本を帶の中央で二つに折り重ねたまゝ、白が外側になるやうに左手に帶の所を持ち、右手で少し下方へ圓を作るやうな心持で、順に右に送ると第一圖の如き恰好になります。

今度はこれを開いて、左五本が下に、右五本が上になるやうにして、帶から二寸程離れた所を左手に持ち、一番内側のを基準に順に次を一・二分宛間のあくやうに引き出してゆるめ、根元を元結でむすび第二圖の如き竹の葉を作ります。



右と同じ葉を三つ作り此の三つを第三圖の如く重ねて結び、次に中央の葉の軸に當る十筋を、五筋づゝ左右に分けて下から後ろへまはし、白が外側になるやうに葉と葉の間から出し下方へ折り重ねて、も一度元結で結び、此の水引で出來上り圖の如く鮑結をし小さく引き締め、先を揃へて切ります。

次にあとに殘つて居る左右十筋宛の中、内側の五筋づゝで圖の如く一つ結び、次に尙ほ後に殘つた五筋づゝを、今結んだ輪の中を下から上にくゞらせて、先きの鮑結と、今結んだのとの中間で結び、今結んだ水引の根元を左右へ少し引いて、其の輪の中へ上から下へ通し、端は全部出來上り圖の如く老の波に卷きます。

以上出來上ましたら赤と白の水引を白が上になる樣に二本を並べて包み紙の後ろからまはし出來上り圖の如く中央の鮑結の下に出し、眞結をして端を老の波に卷きます。

第二十七課　帶料包

出來上り圖

材料

(1) 奉書　二枚。
(2) 赤紙　少々。
(3) 水引　金銀　四尺一本。
　　赤　二尺五寸一本。
　　竹の葉　二尺五寸一本。

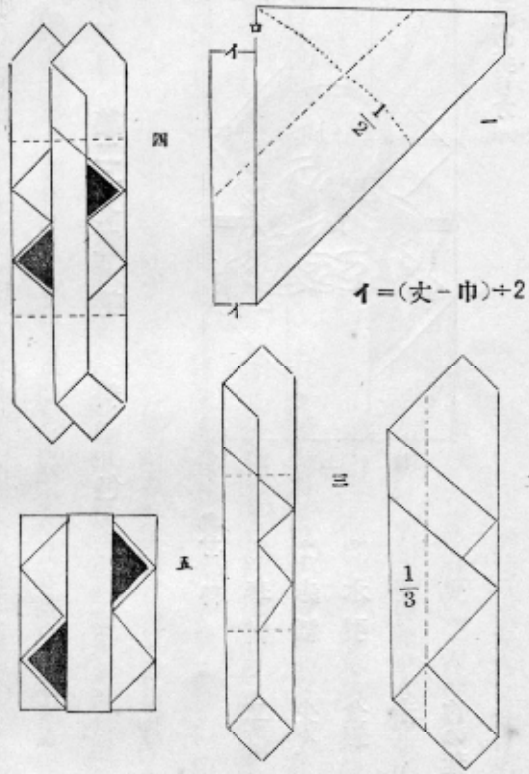
紙の折り方

奉書を外表に第一圖の如くに折り、(イ)(ロ)は同寸になるやうにします。(イ)は紙の丈の長さから幅の長さを引き、殘りの寸法の二分の一とするのであります。

次に今折つて出來た輪と(イ)(ロ)の尖端との二分の一の所から二つに折ると第二圖

となります。

右と同じ折り方のものを今一つ折ります。而して一つは第二圖のまゝに、別の一つは尙ほ幅の三分の一だけ右に（イ（ロ）の先端に向けて）折れば第三圖となります。



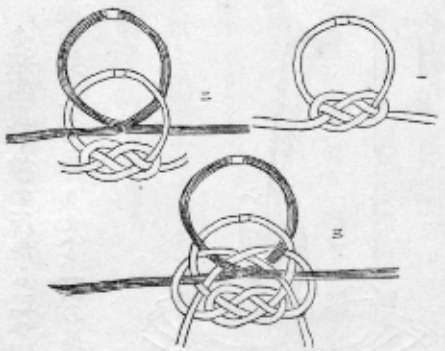
今度は第二圖まで折つてある分を逆さにして、其の右側の上に、第三圖まで折つた分を圖の如くに重ね、丈を八寸位にして上下を後ろに折ります。但し下を先上を後にします。

赤紙は第六圖の如く、兩方に出て居る三角の紙の裏の出て居る所、即ち右上と左下の三角に一分だけ狹くします。但し眞中の折り込みに入る所は中に入るやうに二枚裁ち切つて糊で貼りつけます。

㊂水引の結び方

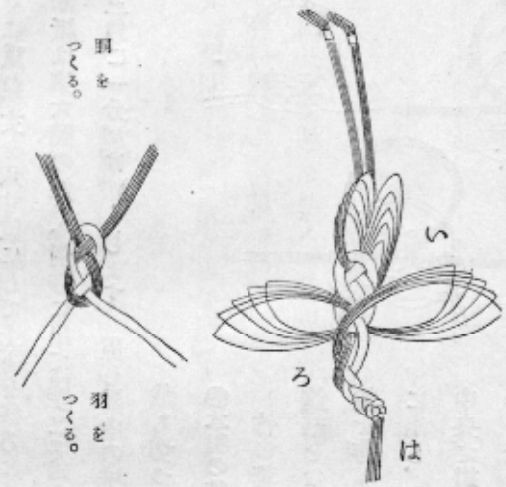
竹の葉の二尺五寸で白を外側に第一圖の如き鮑結をなし、次に第二圖の如く赤の水引の中央で輪を作り、向つて右端を竹の葉のうしろから手前に出し、左は手前から向ふに出し、竹の葉の輪の中央で組み合せ、先は左右に伸し、中央の組み合つて居る所を元結でくゝります。

次に、竹の葉の鮑結した端を第三圖の如く組み合せ、先を鮑結の左右に下向きに出し、五分程の所から切ります。



㊃鶴の結ひ方

金銀四尺を帶の所から二つ切りにし、それで第一圖の如く鮑結を結び、銀で第二圖の如く羽を作ります。羽の長さは先づ初め一寸位の輪にし、内側の一筋を元にして五筋を順に二分位づゝ間があくやうに引き出し、端は背から首の方へ持つて行き背中で一度鮑結に元結で結びつけます。今度は金十筋で尾羽を作ります。尾羽は圖の如く左右兩側を短く、内側になるほど次第に長くつくり其の端は腹の下の所で翼を結びつけた元結で結び



（い）先は腹の下まで持つて行き、六本だけ折り返して羽を結び元結を止めたお止めたて。四本は首になる。
（ろ）金……脚になる分の中四筋を以てつくる。
（は）金四筋と銀五筋。

羽をつくる。

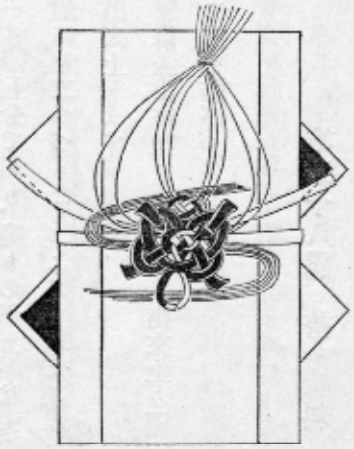
つけます。而してから其の十本の中の六本だけは結び目から二分程の所から又折り返して前の元結で結び後ろに伸して脚にします。

脚は三寸五分位の長さにして端から五分位の所を三本まとめて結び、脚先は三本とも一分位づゝ長さを違へて切り、其の先を二分位曲げて趾の形を作ります。

次に尾羽を作つた殘りの金四筋と前羽を作つた銀十筋とで圖の如く三つ編みを約一寸五分程して、金四筋と銀五筋が嘴になるやうにして其の根元を元結で結び、端は一寸四五分で切り、殘りの銀五筋は頭の所で切ります。それから別に赤一筋で小さい鮑結を二つづゝにして結び、其の鮑結と鮑結とで頭を包むやうにして結びつけると出來上ります。

以上出來上りましたら、出來上り圖の如く下向き即ち舞ひ下る形に、赤水引の中央に胴を結びつけます。

第二十八課　袴料包



出來上り圖

㊀材料

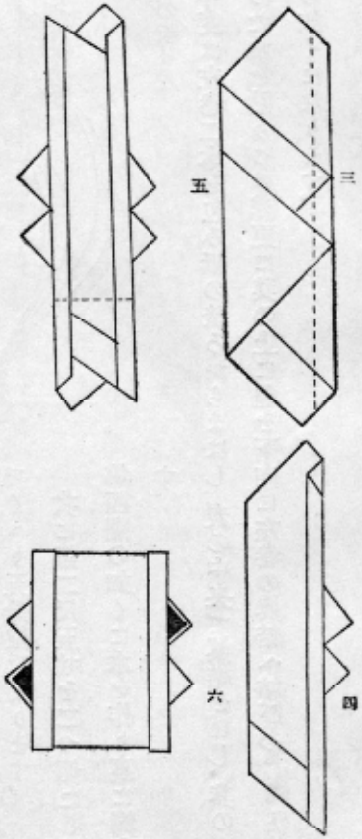
(1) 奉書　二枚。
(2) 赤紙　少々。
(3) 水引　左卷　二尺二本。
　　銀　二尺五寸一本。
　　金銀　二尺五寸一本。
　　四尺一本。

㊁紙の折り方

第二圖までは全く帶料包と同じであります。それを二つ折ります。

右のもの二つとも第三圖點線の通りに八分幅だけ、裏に折り返して、裏から見ると第四圖の如くになります。

第四圖のものを二つ向き合ふやうに右を上に重ね、丈を八寸位にして上下を後に折り曲げますと第六圖の出來上りとなります。



㊂水引の結び方

金銀四尺を二つにして、金五筋の兩側に銀を一筋宛並べ、七筋にて鮑結を一つし、つづいて逆に鮑結を又一つして固くしめ(ロ)の部を切ります。(第一圖參照)。

次に、金銀二尺五寸の中央帶の所で第二圖の如き輪を作ります。これは龜の頭になります。第一圖の(イ)の下をくゞらせて前に結んだ二つの鮑結の中央に鮑結をな

し、其の先を二筋と二筋に分け、龜の後足を間にして下にくゞらせます。而して內側をくゞらせた左右の三筋の分で中央に小さい鮑結をなし、二筋の分と一所にして第三圖の如き形の尾を作り、端を元結でくゝり五分位で切ります。

次に銀二尺五寸を二つ切にして半分で第四圖の如くに水を作り裏に糊を引きます。

今度は左卷二本を包み紙の後ろからまはし、表の中央で眞結をなし、其の上に銀で作つた水を貼りつけ、更に其の上に龜を下向に左卷の眞結へ結びつけると出來上り圖の如くになります。

第二十九課　長熨斗と鶴結

長熨斗は大きな品物又は結納の金包に添へて贈る場合に用ひます。

圖り上來出

一材料

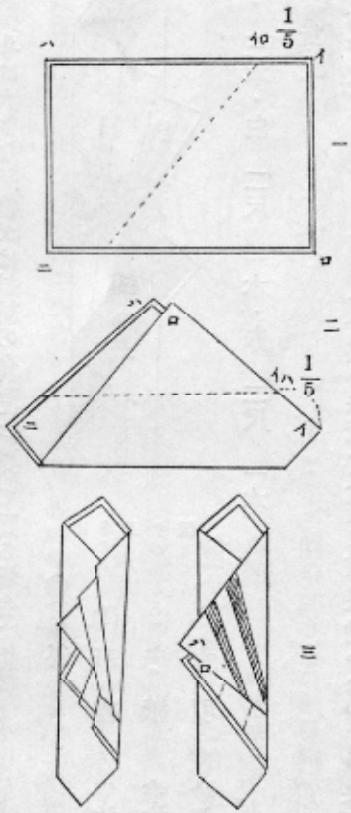
(1) 奉書　半枚。
(2) 赤紙　半枚。
(3) 水引　金銀　一尺五寸　三本・白　二尺　一本・赤　二尺　一本。

二紙の折り方

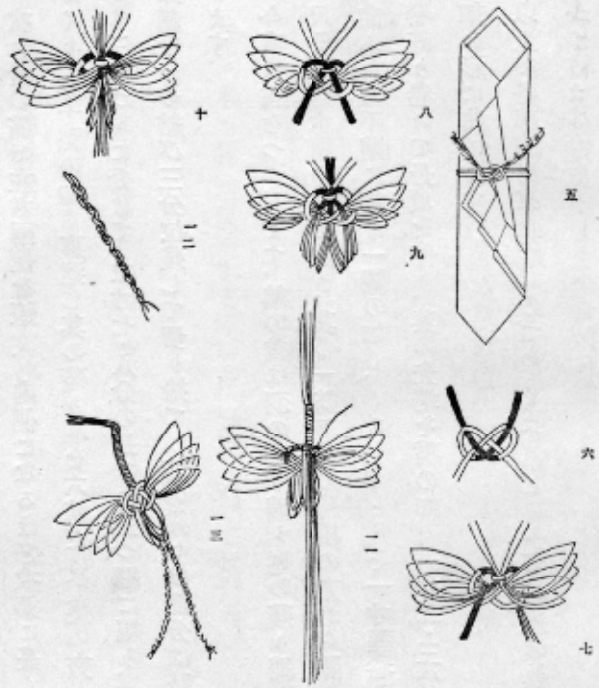
奉書半枚に、それより周圍一分狹い赤紙を外表に重ね、動かぬやう中央に少し糊をつけて貼り、第一圖の如く横に置き、(イ)より左へと、(ニ)より右へ各〻(イ)(ロ)の五分の一を標し、點線の如くに折つて第二圖の如き形にします。

次に第二圖の點線の如く、(イ)より(ロ)に、(ニ)より(ハ)に向つて各〻第一圖の(イ)(ハ)

の五分の一を標し、其の標から第三圖の如くに折ります。今度は第三圖（ハ×ロ）の左へ餘つた分を襞の疊み込みにして、第四圖の如く兩方とも三つの襞を折りますと、頭と下の三角とに赤紙の出た熨斗が出來ます。



以上折紙が出來ましたならば、白の二尺と赤の二尺を、白を上に赤を下に並べ熨斗の後ろからまはして眞結をし、次に赤と白とを一筋づゝ組み合せて、外側を短く內側を次第に三分宛長くして老の波に卷きます。



三　鶴の結び方

金銀一尺五寸の水引二本を輕くしごき金銀がたがひちがひにならぬやうに二本鮑を結び、胴を作り、而して水引の金の筋の方が尾になり、銀の筋の方が羽になるのでありますから、左右の翼の根元が互に抱き合ふやうに兩方から絞り寄せて第六圖の如き恰好をつけて鮑結をしめます。

次に左右の羽をつくります。先づ銀の筋を一寸餘りの長さの輪にし、其の端を第七

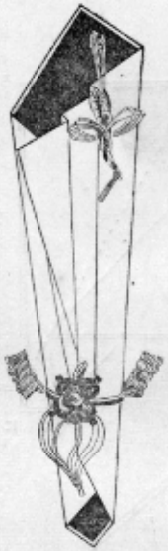
圖の如く前に取つて結び、之を裏返しにすると第八圖の如くになります。羽の先を尖らすには、目打の如き細い物を一筋づゝの輪の中に入れて強く引きます。

次に金の筋で左右兩側を短く、內側になるほど次第に長くして第九圖の如く尾をつくり、第十圖の如く裏返し其の殘り端を六筋だけ、尾の方へ折り曲げ、第十二圖の如く三筋づゝに分けて、二寸七・八分の長さに三つ編に編み、脚にします。而して先を元結で一つ結び三分位殘して切り捨て、其の殘りの部分は趾に見せるやうに形を作ります。

今度は首をつくります。鶴の首は羽の殘り端と尾の殘り端とを束にまとめて、金銀一尺五寸の水引の帶を解き、其の一筋で首の付根の方から隙間なく、又重ならぬやうに向ふから手前に第十一圖の如く、くる〳〵と凡そ一寸程卷き、つゞいて赤の水引を三卷許り卷いて丹頂を作り、其の先端を嘴の如く一寸二・三分殘して切り、第十三圖の如き形に曲げます。

以上で各部が出來上つたのでありますから、之を折紙の眞結の上に舞ひ下る形に結びつけます。

第三十課　白髮包



出來上り圖

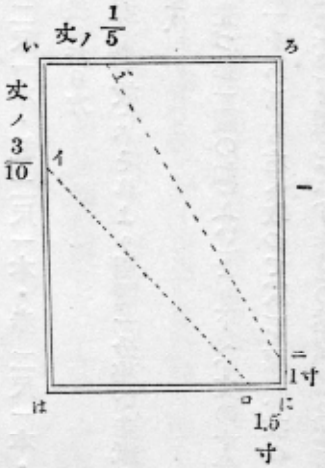
一材料

(1) 奉書　一枚。
(2) 赤紙　一枚。
(3) 水引　金銀　四尺一本・二尺一本・紅二尺一本・赤二尺一本・白二尺一本。

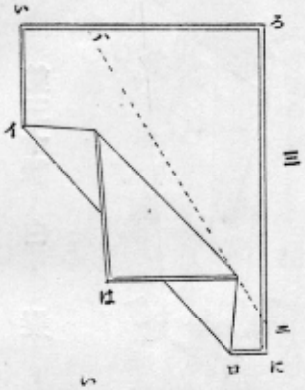
二紙の折り方

奉書一枚に、それより周圍一分狹い赤紙を外表に重ね、中央を一寸糊でとめておきます。

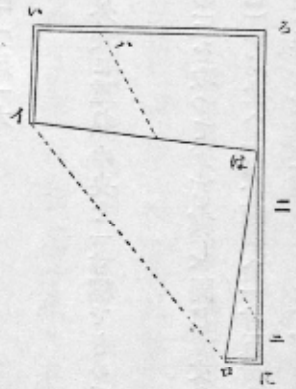
先づ第一圖の如く(い)より下へ、丈の十分の三を取つて(イ)を標し、同じく丈の五分の一を(い)から右へ取つて(ハ)を標し、次に(に)から上へ一寸、左横へ一寸五分を取つて(ニ)(ロ)を標して、(イ)(ロ)の點線から(は)を右に折れば第二圖となります。



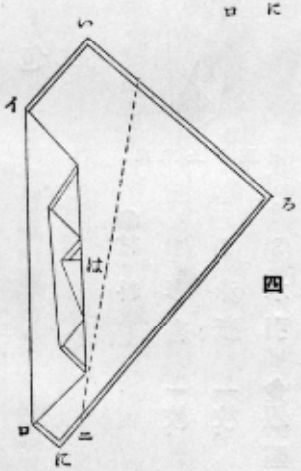
一



三



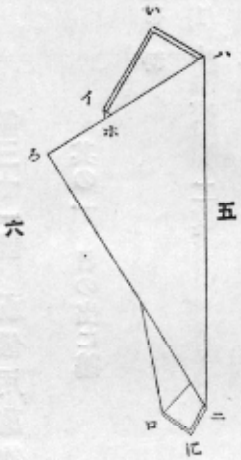
二



四

今度は(は)の紙を、上部は(ハ)(ニ)線と(イ)(ロ)線との中央、下部は(ハ)(ニ)線を目標として左に折り返して第三圖の如くします。更に第三圖の(は)の紙を第四圖の如く凡そ四等分して折り疊みます。

次に(ハ)(ニ)の線から(ろ)を左に折ると第五圖となり、第五圖の(ハ)(ホ)の間を三等分し、(ホ)(ろ)の間を二等分して襞の疊み込みとして全體を折り疊むと第六圖の出來上りとなります。



五

六

㊁水引の結び方

出來上り圖の如くに上から鶴を舞ひ下らせ、下には龜をおき、鶴と龜とが向ひ合ふやうにつけるのであります。

(一)鶴　鶴は金銀四尺を帶の所で二つに切つた半分の銀と、紅の二尺とで帶料包の時

と同じ結び方で結びます。

(二)龜　龜も矢張袴料包の時と同じ結び方で、鶴に使つた殘りの金五筋だけで胴を結び、金銀二尺を頭・甲・尾に使ひます。

以上鶴と龜が出來ましたなら、龜は下から五寸程上つた所へ、赤の二尺、白の二尺の二本を龜の背に通して、紙の後側で眞結をし、紙の兩端に出た水引は左右とも紙より五分長く(下を)赤・白二筋を一所に卷き、次は順に上へ二分づゝ長くして、全部老の波に卷きます。鶴は上部に元結で結びつけます。

第三十一課　祝儀用萬物包

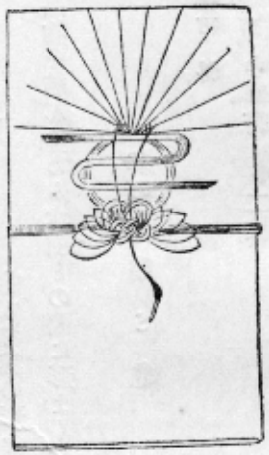
其の一　日の出に鶴

一材料

(1) 中奉書　二枚。

(2) 水引　金銀　二尺一本。　銀　二尺五寸一本。

赤　二尺五寸二本。　金銀　四尺一本。



出來上り圖

二紙の折り方

紙二枚を外表にして、左の端に紙の紙の來るやうに品物を包みます。

三水引の結び方

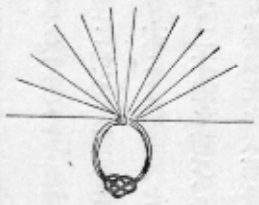
先づ、赤二尺五寸一本と一筋と合せて六筋で鮑結をし、帶の付根でかたくしめ、其の先を直徑二寸五分位の輪をつくつて元結で結び、なほ其の先を二寸二・三分位に切つて置きます。これは日の出になります。

次に金銀四尺を二つ切りにして、帶料包の鶴と同じ鶴をつくります。先づ金と銀とで二本鮑を結び、此の鮑結を縦に使つて胴とし、銀で舞羽をつくり、金で尾羽をつくり其の先を六筋後ろへ折り返して脚をつくります。

羽の先の銀と尾羽の先の金四筋とで、三つ編に組んで、首・頭・嘴をつくります。

鶴が出來ましたら、鶴の尾羽と脚との境の金を折り返した所の小さい輪に、金銀二

尺を通し、其の先を又、前に結んで置いた赤の鮑結の帶の所に上から下へくゞらせて、品物の裏に載せ、金銀の先を品物の裏で眞結にします。



御光のつくり方

次に、赤でつくつた圓の裏側へ糊を引いてまん丸くして紙の上に貼りつけます。其の先の十二筋の赤は、水平線上に御光がさす形に一筋づゝの間隔を等分にして、半圓の間に貼ります。

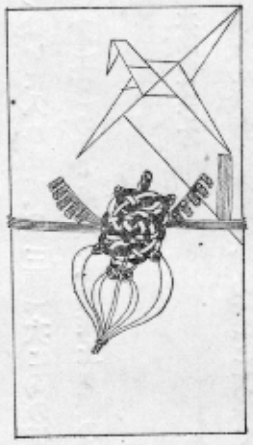
それから二尺五寸の銀を半分に切つて、其の一方を三つに曲げて雲の形をつくり、裏から糊を引いて、日の出の御光と、品物を結んである水引との間に形よく貼りつけます。

其の二　鶴と亀

㊀材料

(1) 中奉書　二枚。

(2) 水引　金銀　一尺五寸四本(亀)・赤　二尺五寸一本・白二尺五寸一本。



出來上り圖

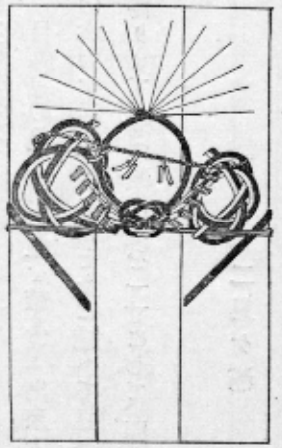
㊁紙の折り方

中奉書一枚で祝儀用箸包の鶴と同じ方法で鶴を折ります。鶴の大さは最初五寸に折つて之を折り返へして二寸五分角とします。他の一枚の紙を以て品物を包んで、先に折つた鶴が包み紙の表、右上になるやうにかぶせて、鶴を折つた紙の左端は包んだ紙の内側に入れます。

㊂水引の結び方

目錄包の亀と同じ亀を結んで、出來上り圖の如くに、赤の二尺五寸と白の二尺五寸の水引を赤を下に、白を上に揃へて包み紙の表で眞結をして、殘りの水引で老の波を作ります。老の波は下を一寸にして、間を三分づゝはなして卷きます。

其の三　二見ケ浦



出來上り圖

㈠材料

(1) 中奉書　二枚。

(2) 水引　金銀　四尺一本・三尺一本・二尺五寸三本・赤　二尺五寸二本。

㈡紙の折り方

一枚の紙の左端(イ)(ロ)から包む品物の三分の一の幅を(1)(2)(3)(4)(5)と五つ取ります。次に(2)の折り山を(1)に、(3)の折り山を(4)に重ねると第二圖のやうになりますから、それに別の一枚の紙を(3)の襞の中に一つぱいに入れます。(第三圖)。次に(5)の折り山から向ふ側に折つて、左手に返へして更に(イ)(ロ)の端に揃へて、出來上り圖のやうに內側に折つて、品物を其の中に入れます。

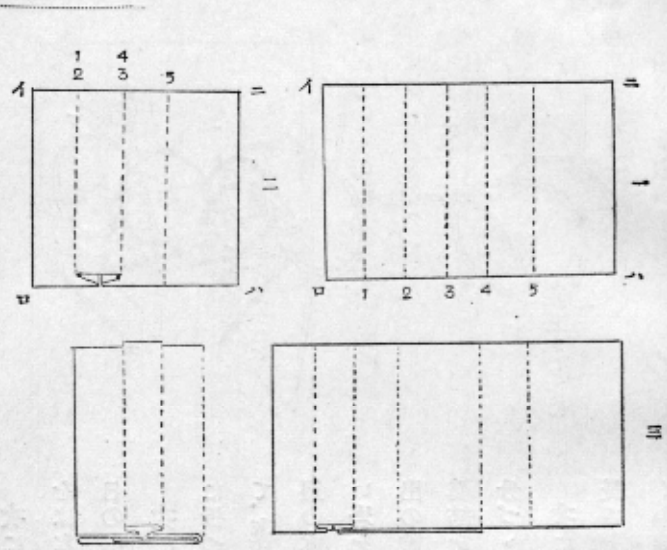
㈢水引の結び方

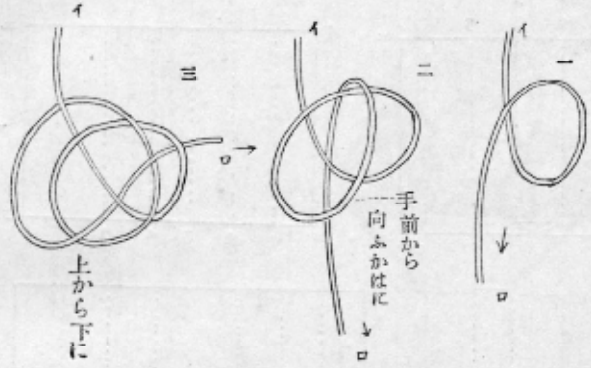
四尺の金銀の水引を帶の所で二つ折りにし、金を外側にして鮑結を結んで、裏側から糊をつけます。これが男岩になります。

次に三尺の金銀の水引で逆鮑結をして前と同樣に裏側に糊をつけます。これが女岩になります。

㈣逆鮑結の結び方

逆鮑結は普通の鮑結と水引のかけ方が全部反對になります。即ち一一四ページ第一圖の如くに(イ)の端を下にして輪を作つて、(ロ)の水引を今作つた輪の手前から向側に廻して、(第二圖)。(ロ)の水引を先の輪の上から下にくぐらせて、又上下と反對にくぐらせます。(第三圖)。





次に、赤の二尺五寸を一本と他の一本の一筋をはなして都合六本で鮑結をして、其の殘りで日の出を作つて、元結で結んで置きます。

次に、二尺五寸の金銀二本を帶の所から二つに折つて、其處が包み紙の兩端に來るやうにして、裏側で眞結をします。而して表に出て居る銀の水引の左側に男岩の帶の所を、右側に小さい岩を通して、なほ其の先を前に結んだ日の出の鮑結びの帶の處に通して、包み紙の眞中で眞結をして、其の先は下を一寸離して、間を三分づゝあけて老の波に卷きます。

次に日の出を糊で貼りつけ、日の出の御光の長さを包み紙の幅の半分を半徑とする圓を畫く心持ちで、御光の間隔が等しくなるやうに糊をつけて貼りつけます、而して裏側で結んだ金の水引の先を銀の水引の下からくぐらせて置きます。

次に金銀の二尺五寸の水引を半分に切つて金ばかり三本を用ひて、最初に二本で繩をなつて、殘りの一本を更に其の上に卷きつけて、御幣を三ケ所につけます。

注連繩が出來ましたなら、左右の岩の上に結びつけます。

其の四　花　籠

出來上り圖

材料

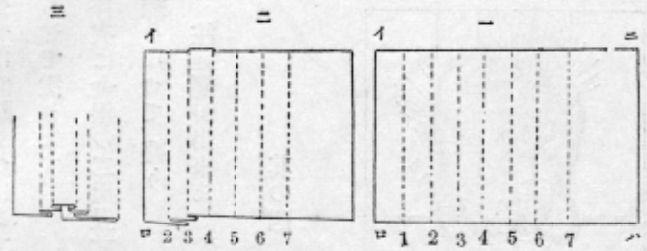
(1) 中奉書　二枚。

(2) 水引　金銀　四尺二本・二尺五寸一本・二尺一本。

金　三尺一本・赤　二尺一本。

松葉　二十五本・青　二尺五寸一本。

造花用針金　四本。

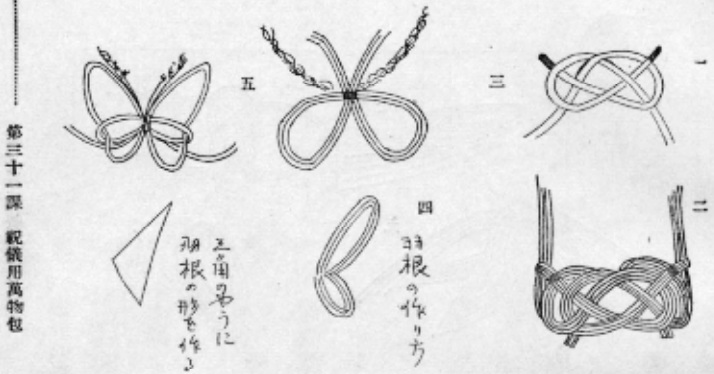


㊀紙の折り方

品物の幅の四分の一を計つて、其の幅を第一圖の如くに七通り折りをつけます。而して第二圖の如くに(2)の折り山を(1)に(3)の折り山を今作つた襞の深さの所迄重ねます。右の半分も同樣に(5)の折り山を(6)に(4)の折り山を其の襞の深さ迄、重ねますと第三圖の如くになります。殘りの一枚の中奉書は二見ケ浦の萬物包と同じに、(5)と(6)の中央から重ねて折ります。

㊁水引の結び方

金銀四尺の水引二本を別々に帶の所から二つに折つて、第一圖の如くに銀を外側にして二本鮑結をします。而して銀四本を鮑結の上の銀に並べて、裏側でたがひちがひにして中央を水引で結び、先は下に出して籠の足に見せ短く切ります。(第六圖)。殘りの金五本と、銀一本とを合はせて、



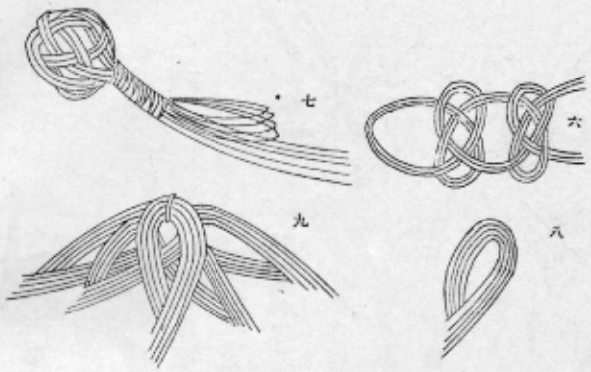
又それを二つづゝに三つに分けて、三つ組に編んで籠の柄を作つて、柄の先で蝶を作ります。

㊂蝶の作り方

籠を反對に向けて柄の先を元結で一つ結んで、銀一本と金二本とを殘して、殘りの三本で第三圖のやうに、左右に蝶の羽根を折つて、又元結で結んで、三角の形に羽根を左右折つて、殘りの水引で蝶の第二の羽根を折ります。(第五圖)。而して最後の水引の殘りを、外側を長く內側を短かく卷き(蝶の觸角を中を五分の長さに、順次二分づゝ長く)初めに殘した三本も外側を長く內側を短かく切つて置きます。

㊄松笠の作り方

二尺五寸の金三筋で鮑結を二つ續けて、第六圖の如くにし、次に第七圖の如くに丸みをつけます



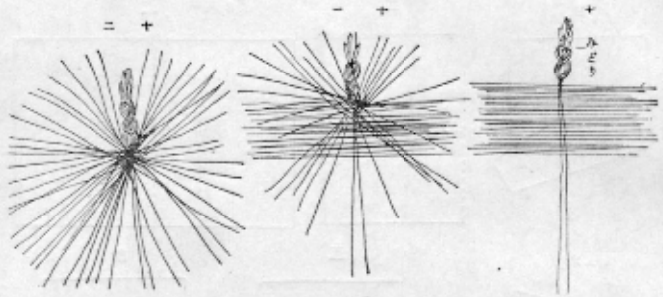
と松笠のやうなものが出來ますから、柄に金の水引を三分程巻きます。

㊅竹の葉の作り方

青の二尺五寸の水引五筋と銀のなるべく細いもの一本とで第八圖のやうに、外側に銀を入れて形づくり、裏に糊を引いて形のくづれぬ様にし、此の竹の葉を五枚拵へて、第九圖のやうに組み合はせて、造花用の針金を二本にして、かたくねぢて留めて置きます。

㊆梅の作り方

赤の二尺の水引と、銀の二尺の水引とを二つに切つて、銀一筋と赤一筋とで鮑結びを作つて、瓣を五瓣續けて梅の花結びを作ります。而して銀を蕊に、赤を裏側に通してそれに金の水引を一寸



程巻きます。

㊇松葉の作り方

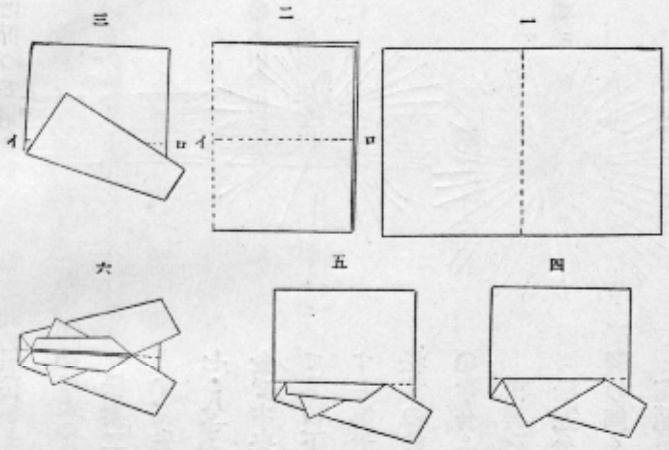
松葉二十五本を六つ切りにして、三つの松葉を作ります。先づ最初に松のみどりを作りますために、長さ七・八寸の長さの金の水引を四つ折にして、造花用の針金で中央をねぢつて、水引の捻と反對によります。而して其の下に第十圖の如くに松葉をはさんで、ねぢりますと第十一圖の如くになります。同じものを三つ拵へ、松葉の枝には金の水引を一寸位巻きます。

㊈松・竹・梅のまとめ方

松葉を二つを一枝にまとめて、金の水引を巻きながら松笠を附け、次に松葉・梅・竹の順序につけ、出來上り圖の如くにまとめて籠の中央の元結に結びます。

花籠が出來上りましたら、左巻二尺の水引二本を帶

の所から二つに折つて一本づゝ品物の角にあて包み紙の裏側で眞結をなし、花籠の飾結の穴に通して眞結をなし、先を一寸はなして下から三分づゝ間を置いて卷きます。



第三十二課　魚の尾包

一材料

(1) 小奉書　一枚。

(2) 水引　金銀　二尺又は三尺二本。魚の大小により加減す。

二紙の折り方

奉書を第一圖の點線に從つて眞二つに折りますと第二圖となります。更に之を二つに折つて開きますと、第二圖の點線の如くに中央に(イ×ロ)の線が出來ます。

次に(イ)の部、即ち紙の輪になつて居る方を魚の尾の大小によつて寸法を定め、(ロ)の方の開きも尾の廣がりに合せて第三圖の如く紙の一方を折り、更に第四圖の如く中央の點線から折り返し、殘りの紙を熨斗の形に折れば第五圖となります。

他の一方もこれと同樣に折れば第六圖となり折紙は出來上ります。

三水引の掛け方

魚の尾を以上の折紙で包み、其の上に金銀の水引二本で眞結をなし、水引の先は輪にしておきます。

第三十三課　目　錄　綴

一材料

(1) 奉書　三枚。但し必要に應じて、紙數が奇數になるやうに增す。

(2) 赤紙　少々。

(3) 水引

金銀　三尺二本・二尺五寸一本・一尺五寸一本。

出來上り圖

㈠紙の折り方

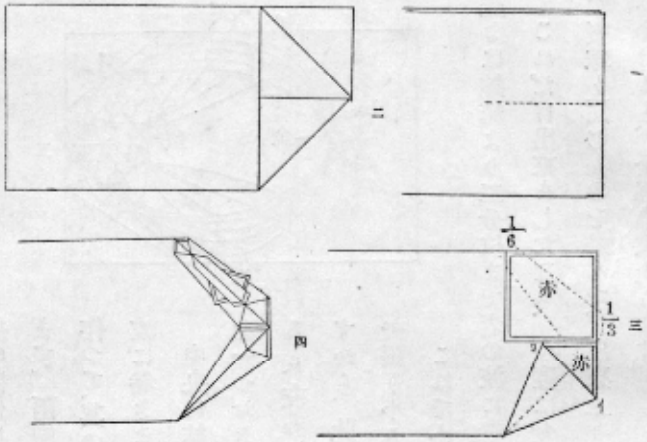
奉書三枚を一枚づゝ縦を二つ折りにして三枚を重ね、上・下の紙を、表紙とし、中の紙に目錄を記するのであります。

先づ上表紙の綴ぢ目の方に熨斗を折るのであります。

熨斗の折り方は、紙の右端で幅を二つに折り、第一圖の點線の通りに筋をつけ、其の筋に沿つて、手前の方即ち紙の輪になつて居る方の隅を三角に折り、向ふの方は二枚重なつて居る中の一枚だけを點線に沿つて三角に折ります。

次に手前の方の三角は、開くと第三圖の形となります。これに赤紙を周圍五厘づゝ控へて中に止め糊をして貼ります。

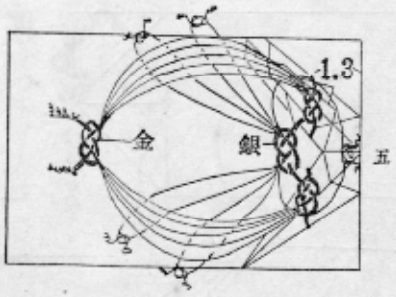
次に向ふの四角で熨斗を折ります。第三圖に示しましたやうに、熨斗の頭を幅の三分の一に、下を六分の一に取り、第四圖の如き熨斗を作ります。下の熨斗は第三圖(イ)(ロ)の角が、中央の線のところで突き合ふやうに兩方から向ひ合せて折ると第四圖の如くになります。



㈡水引の結び方

以上出來ました折紙三枚をよく揃へ、右端から約一寸三分入つたところ、即ち熨斗の凡そ中間に當るところで、二つの熨斗のそれ〳〵の兩端に穴をあけ、金銀の三尺を一本づつ、金を外側に銀を内側に後ろから通して、熨斗の上に鮑結を一つづゝ結びます。

次は、今結んだ鮑結の銀の端が、二つの鮑



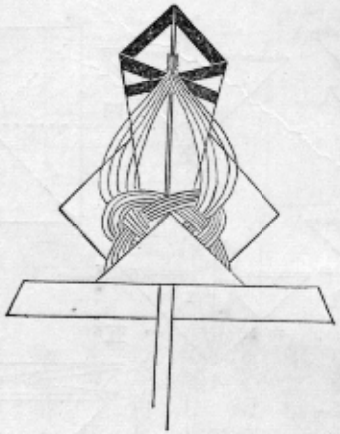
結の內側に來ますから、中央で銀と銀とで鮑結を一つします。兩端に出た金は、第五圖に示した樣に大きく圓を作つて、其の端で鮑結を一つ結び、更に其の餘り端は老の波に卷きます。

中央に結んだ銀の先は、左右に分けて、金の五筋の間を一つおきに通し、先は二筋で小さな鮑結をします。すると、左右に鮑結が二つづゝ出來て、なほ一筋づゝ殘りますから、此の左右の二筋を熨斗の頭の方に持つていつて矢張り小さな鮑結をします。

これで小さな鮑結が都合五つ出來ますから、五つとも先きは鮑結より二分位まで老の波に卷いておきます。

これだけ出來ましたなら、今度は金銀二尺五寸と同一尺五寸とで壽留女包につけた實珠と同じものを結んで、出來上り圖の如くに中央の銀の鮑結に實珠の中央を結びつけると、全部出來上ります。

第三十四課　御神酒口



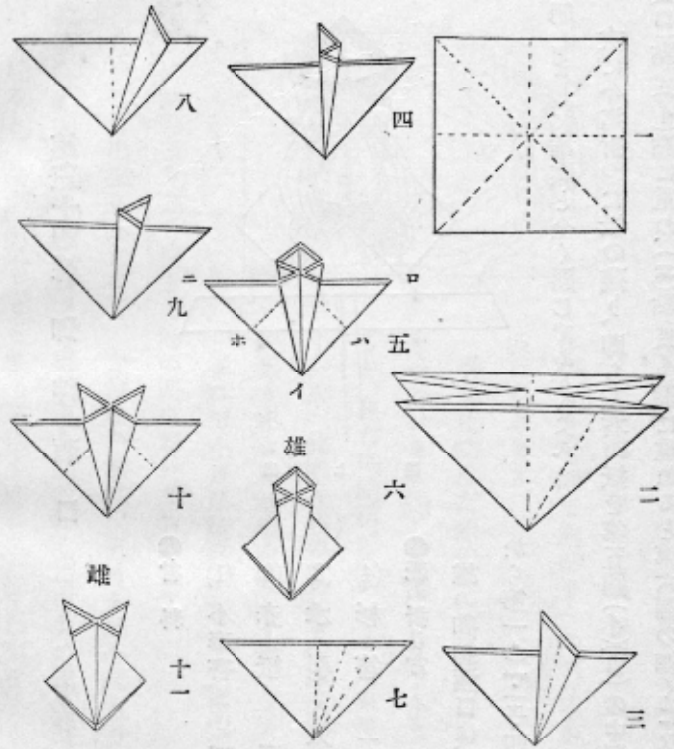
㊀材料

(1) 小奉書　一枚半。
(2) 赤紙　一枚。
(3) 水引　金銀　一尺五寸二本。
(4) 杉箸　二本。

㊁紙の折り方

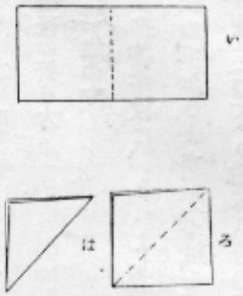
雄の御神酒口は、紙の切り方、合せ方から第一・二・三・四・五圖までは前に說明しました雄蝶と全く同じであります。

次に今迄折つた紙の殘り、即ち左右の紙を第五圖(イ)(ロ)の中間(ハ)より折り曲げ(ロ)點を(イ)點に重ね、(ニ)點を(イ)點に重ねると第六圖の如くになります。

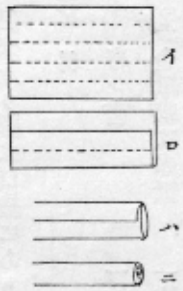


雌の方も雌蝶の折り方と同じで、あります。第十圖の點線から左右の紙を折りますと第十一圖となります。

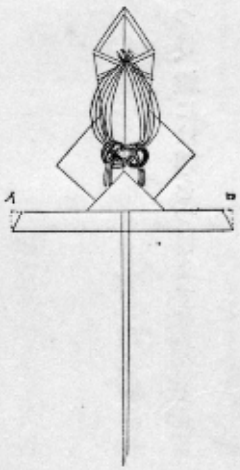
次に雌雄とも最後に折つた後側の四角と同寸の正方形を二つつゞけた形の紙を一枚づゝ切ります。これは最初正方形を取つた殘りの紙でとります。(い)(ろ)(は)圖の順に、はじめ二つに折つて正方形にし、つゞいて對角線に沿ひ三角形に折ります。



次には第六圖及び第十一圖の四角形の對角線の長さの一倍の幅、一倍半の長さの長方形を雌雄とも、一枚づゝを切つて、(イ)圖の如く幅を五等分して、(ロ)(ハ)(ニ)圖の順に折り、出來上り圖の如く(ニ)圖の紙の間に(は)圖の三角をはさみ、又三角の間に雄或は雌を挾みます。



此の時別に金銀一尺五寸で結んだ飾結を前側の三角と雄(雌)との間に一所にはさみ、杉箸の先きを割つて、其の間にはさ



(イ)(ロ)の所は幅の二分の一を斜に切る

んで元を元結でかたく括ります。

第三十五課　富の尾

出來上り圖は口繪にあります。雄には龜をつけ、雌には鶴をつけます。

㊀材料

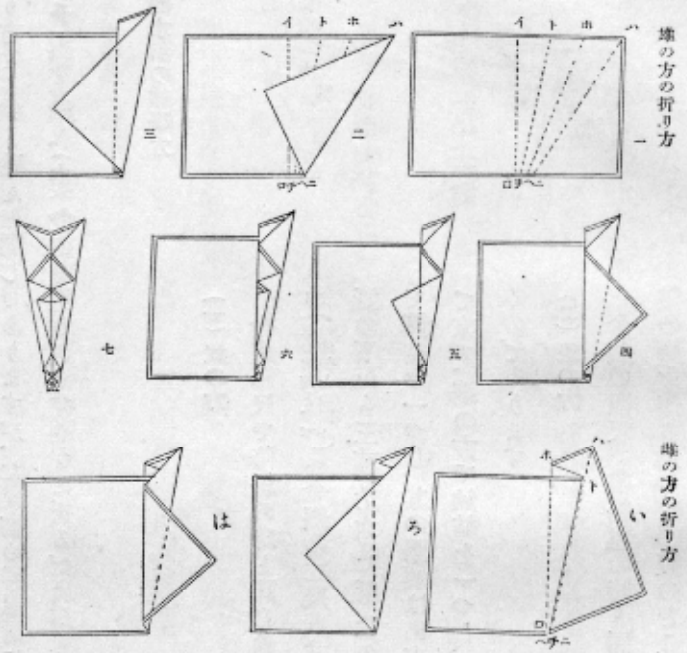
(1) 奉書　一枚。
(2) 金紙或は赤紙　一枚。
(3) 水引　金銀　四尺二本・二尺五寸三本。

㊁紙の折り方

(一) 雄の方

奉書半枚に、それより周圍一分づゝ狹い金紙又は赤紙を外表に重ね、中央を糊で止めておきます。先づ紙を縦に眞二つに折つて中央(**イ**)(**ロ**)の線を作ります。

次に(**ロ**)より右へ八分の(**ニ**)と、右上の角(**ハ**)とに折目をつけ、(**ハ**)(**ニ**)線とします。この(**ハ**)(**ニ**)線と(**イ**)(**ロ**)線との間を三等分して屏風折りにしますと(赤紙を見て(**ト**)(**チ**)線は引き込み(**ホ**)(**ヘ**)線は高くなる。)第三圖となります。更に殘りの紙を順に第四・五圖の樣に前の折り幅に揃へて屏風折にすれば第六圖となります。他の一方も同樣な方法で折りますと第七圖が出來ます。

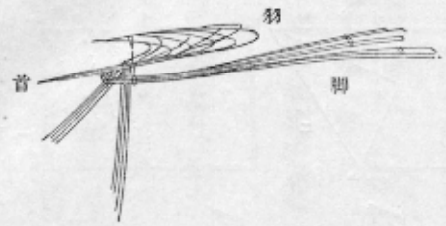


(二) 雌の方

雌は紙の大さ及び折

り方とも雄と殆んど同じでありますが、たゞ初め屏風折にした所を(い)圖の樣に(ト)(チ)線を高く、(ホ)(ヘ)線を引き込ますやうに折るだけが異つて外は全部同じ方法であります。

㈢水引の結び方



(一)雄の方

金銀四尺で袴料の時と同じ龜を結びまして、其の龜の背中(上の鮑結と、下の鮑結との間)へ金銀の二尺五寸を通し、前に折りました包紙の下から三寸位上つた所へ、龜の胴がいくやうに載せ、裏で眞結を一つし、其の兩端は出來上り圖の如くに、表へ持つて來て、端の方で鮑結を一つし、其の先は老の波に卷いておくのであります。

(二)雌の方

金銀の四尺で帶料包の時と同樣の鶴を結びます。此の時鶴の脚を作る爲めに、腹のところから六本だけ折り返す金の水引の輪になつて居る所へ、(圖參照)金銀二尺五寸を通して雄の時と同樣、包み紙の下から三寸程上つた所へ、表から裏にまはして、裏で眞結を一つして、兩端は表に持つて來て鮑結を端の方で一つして、先は老の波に卷いておきます。

第三十六課　雄蝶と雌蝶

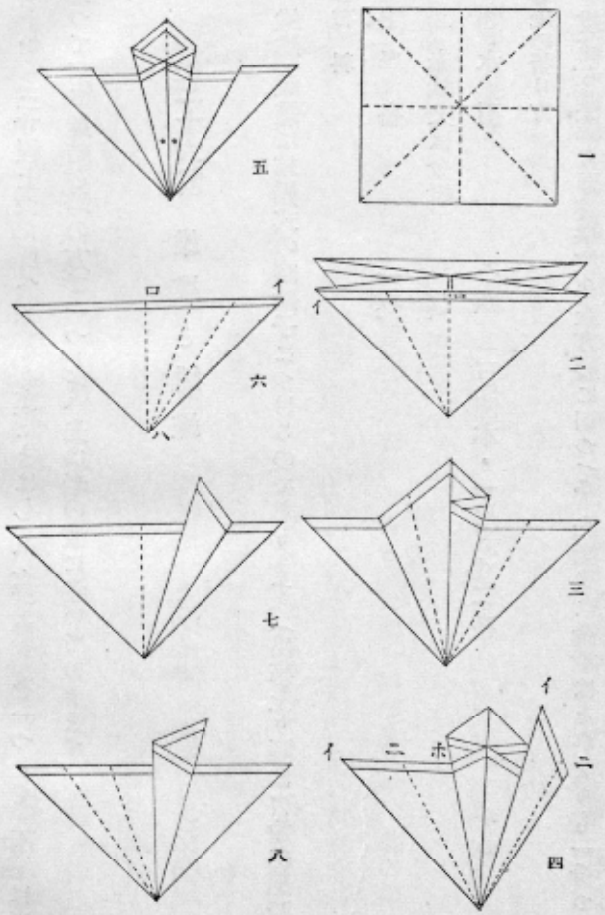
雄蝶・雌蝶は結婚式の時銚子につけるのであります。(出來上り圖は口繪參照)。

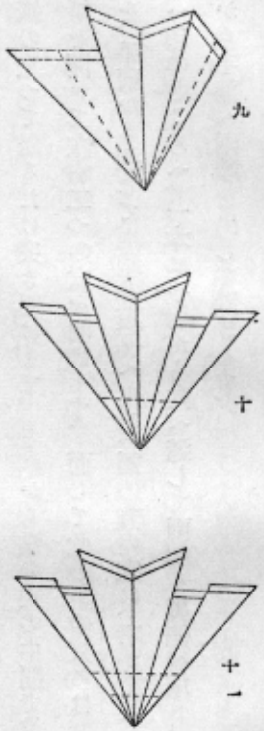
㈠材料

(1)奉書　一枚。
(2)赤紙又は金紙　一枚。
(3)水引　金銀　二尺四本・一尺五寸二本。

㈡紙の折り方

雄蝶も雌蝶も奉書半枚を正方形に切つて、赤紙又は金紙はそれよりも一分づゝ廣くしたものを切ります。而して赤紙と奉書の裏とを重ねて眞中に一寸糊をつけて第





一圖の如くに折目をつけます。

次に同じ側の對角線と對角線とを合せて、第二圖の如くに、三角形に折ります。此處迄の折り方は雄蝶も雌蝶も同じでありますが、これからの折り方がちがひますから、別々に記します。

(一) 雄蝶の折り方

第二圖の如くに折れましたら、(イ)(ロ)の折を二つに折り、更に又二つに內側に折りますと第三圖のやうになりますから、片方もこれと同樣に折ります。

次に第四圖の(イ)線を(ホ)線に合せ、(イ)(ホ)の中央二線を折り二點で襞の深さを二分位にして下は自然細く消えるやうに外側へ折り返します。それから下の尖つた所

と上部までの丈の三分の一を下から上へ折り、それの半分より一分多く下へ折り、尖端が一分下へ出るやうにして嘴とします。

(二) 雌蝶の折り方

雄蝶の折り方の第二圖のやうに折つたものゝ(イ)(ロ)の長さを三等分して、第七圖のやうに內側に卷き込みますと、第八圖の如くになり、左の方も同樣に折りますと第九圖となります。それから兩方の羽も雄蝶と同じやうにつ折て、嘴を折りますと出來上ります。

雌雄共折紙が折れましたら、蝶の頭の丈の三分の一の所へ左右目打で穴を明けて、紙の重つて居るだけ突き明けます。それから蝶の丈の中間で眞中に折り寄せてある紙を開いて左右二つの穴を明けます。而して此の上の穴には、三筋殘した中の一筋を、手前から通して兩端を裏側へ出し、頭の方の穴は、嘴を下へ引き擴げて、第五圖の‥印のところへ、一本は手前から向へ通して兩端を裏側へ出し、なほ他の一本は向側から手前へ兩端を出して置きます。

㊂水引の結び方

金銀二尺の水引で鮑結をして、鮑結が蝶の中央になる位にしめます。

次に金銀二尺を一本帶の所から切つて十筋とし、金銀の中、一筋と二筋とを殘して、あとの七筋を金銀を交互に並べて、鮑結の下に橫にして鬚とします。

金銀一尺五寸の水引を帶の所から二つに折つて、鮑結の水引の帶と鬚の中央とを挾んで鮑結の水引と一しよに動かないやうに、元結で結びます。(この組み合せ方、結び方は合蝶と同じであります)而して、上に眞直に立つ一尺五寸の金銀を、矢張交互にならべて、裏から糊をつけて置きます。

これを第十一圖の如くに折紙にあて、手前に拔き出してある左右一本づゝの水引を鮑結の下の輪に通して、前で眞結に結び、其の端を目打で老の波に卷いて、眼の形にします。

左右に長く出て居ります七筋の鬚は、外側二本を同じ長さ(紙より五分離して)に老の波に卷き、順次を二分づゝ長く、二本づゝ並べて卷きます。

水引のかけ方は雌雄とも同じであります。

第三十七課　長熨斗包

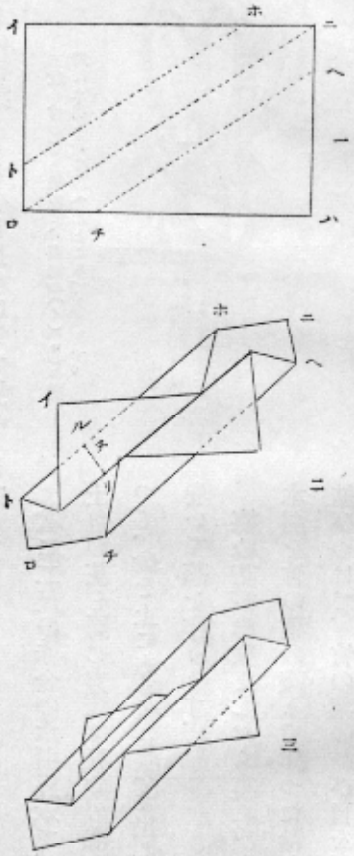
出來上り圖は口繪にあります。

㊀材料

(1) 中奉書　一枚。
(2) 赤紙　一枚。
(3) 水引　竹の葉　二尺三本・青　二尺二本・
　　赤　金　二尺五本・金銀　二尺五寸二本、

㊁紙の折り方

中奉書から四方一分狹く赤紙を裁ち切り外表にして、中に赤紙を重ね、中央を一寸糊で留めます。次に第一圖の如くに机の上に紙を置いて(**ロ**)(**ニ**)の對角線を折つて(**イ**)(**ニ**)と(**ニ**)(**ハ**)の各の長さを四等分した所を(**ホ**)(**ヘ**)とします。次に(**ロ**)からも(**ニ**)(**ホ**)と同寸に(**ロ**)(**チ**)を(**ニ**)(**ヘ**)と同寸に(**ト**)(**ロ**)を標して、(**ホ**)(**ト**)(**ヘ**)(**チ**)を中の對角線に向つて折ります。次に左右とも對角線から外側に折り返へして、(**リ**)(**ヌ**)の幅を三等

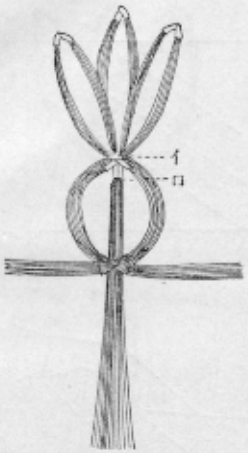


して、其の寸法を計つて、(**リ**)から其の寸法を四度取つて、殘りの(**イ**)(**ル**)の寸法を三等分した寸法が熨の深さになります。(第二圖)。次に第三圖の如くに先に計つた熨幅と熨の深さの通りに熨を取りますと、三つ目の熨は左端の熨斗の折り目と重つて熨の折り殘りも熨幅と同寸になります。左前が出來上りましたら右前も同樣に折ります。

㊂水引の結び方

二尺の竹の葉の水引三本で肴料包の竹の葉と同じものを三つ拵へて、眞中の葉を

上に、左右の葉を其の下に重ねて葉の結び目を今一度元結で結びます。而して圖の如くに三枚の葉の裏側の(イ)と(ロ)の場所に青の二尺の水引の二つに折つたのを足して、白の水引を上に出して、輪を作つて元結を十文字にかけて、しつかり結びます。次に左右に出た水引を結んだ際から一本の元結を全部丁寧に卷いて、左右に二本宛出て居る白の水引を元結の際迄卷いて、殘りの水引は松葉の形に適當の長さに切ります。但し眞中に出した竹の葉の殘りにも輪の結び目から一本半の元結を卷いて、左右の松葉よりも少し長めに切つて置きます。



三枚の竹の葉を集めて、裏面の(イ)、(ロ)の場所に水引を新に加へたところであります。

次に二尺の赤金の水引五本で、勝男武士包の花と同じ方法で五瓣の梅の花を作つて、金を上に赤を下にぬき出して、金を卷いて蕋を作ります。

梅の花が出來ましたら裏に出した赤の水引を竹の葉の殘りで作つた輪の眞中に結びつけて、竹の葉の結び目をかくします。

次に金銀二尺五寸二本を一しよに長熨斗の丈の中央にかけて、竹の葉の輪に通して眞中で眞結をして、左右に老の波を作ります。老の波は下を結び目から五分離して卷き、次は二分づゝ離して卷きます。

昭和三年八月七日印刷
昭和三年八月十二日發行
昭和六年二月一日第二版發行

【定價金七拾壹錢】
日譯作詩 折紙と水引夾附

著作者 大妻コタカ
東京市四谷區本村町二七番地
發行者 合資會社 文光社
右代表者 大元茂一郎
東京市京橋區南紺屋町四番地
印刷者 福神和三

著作權所有

發行所 東京市四谷區本村町二七番地 合資會社 文光社 振替口座 東京 六六三二一番
發賣所 東京市京橋區南傳馬町二ノ五 目黑書店 振替口座 東京 二八〇九番

(印刷所 福神製本印刷所)

BUNKOSHA